

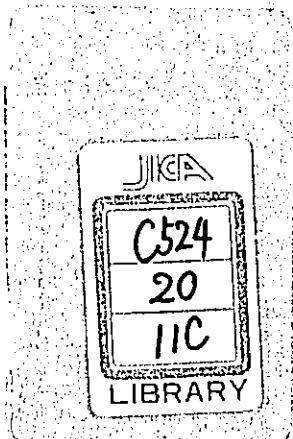
派遣専門家オリエンテーション資料

ナイジェリア

FEDERAL REPUBLIC OF NIGERIA

任国情報

1991年



国際協力事業団
国際協力総合研修所

JICA LIBRARY



1094812(3)

国際協力事業団

17564

はしがき

この任国情報は国際協力のために赴任される専門家およびJICA役員等に、任国での生活上必要な事項についての情報を提供するものです。

本書の刊行にあたっては当該国に派遣中の専門家、JICA事務所員、プロジェクト調整員、協力隊調整員とその御家族の多大な御協力を得ました。また、外務省、在外公館、その他関係機関の御好意により、貴重な資料の一部を利用させていただきました。

今後も、本書の内容を一層充実させ、常に、新しい情報の提供に努めたいと考えております。

本書が国際協力の分野で活躍される方々の参考となれば幸いです。

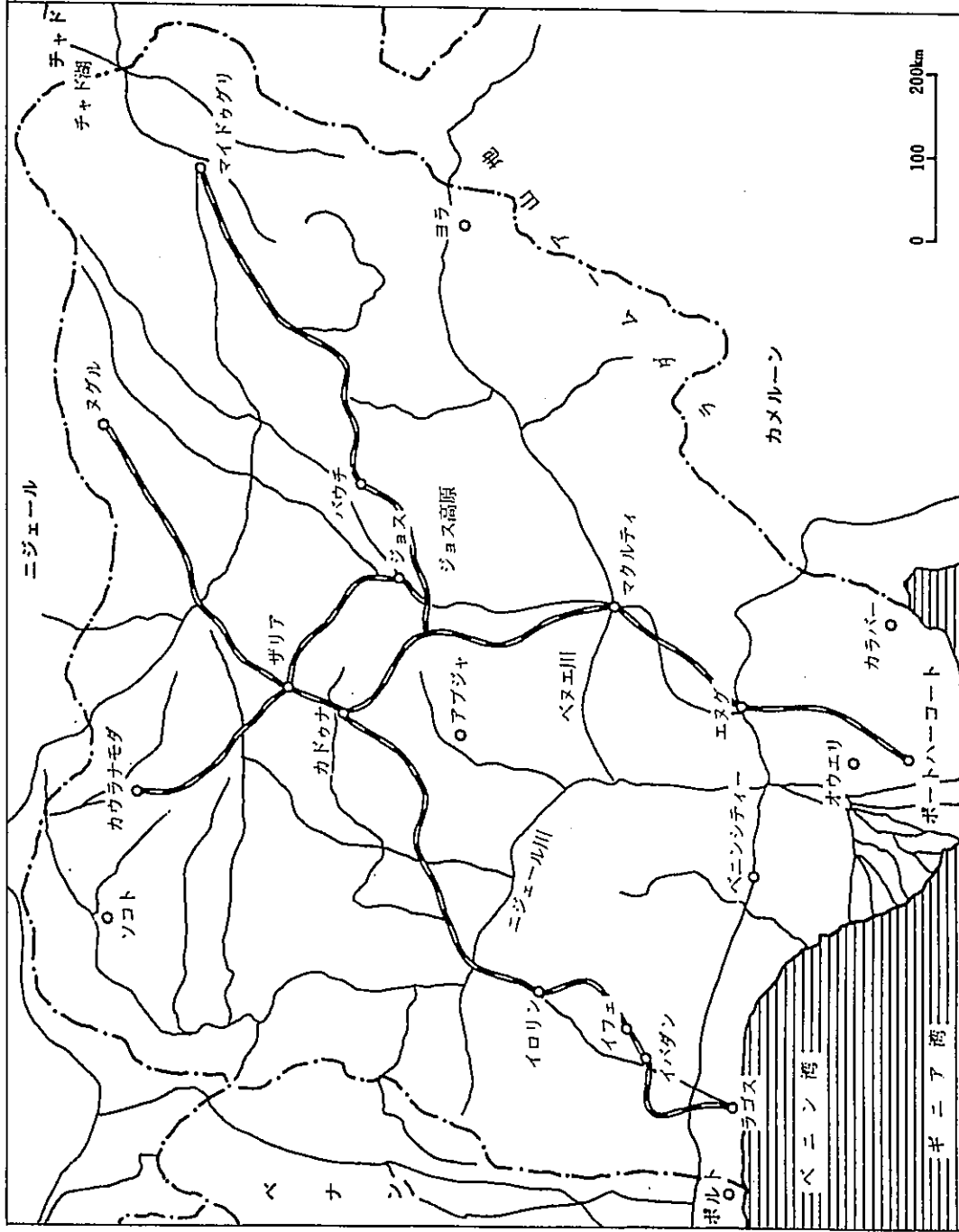
平成 4年 2月

国際協力事業団
国際協力総合研修所所長

17564

10652731

ナイジェリア



目 次

I 一般事情

| | |
|------------|----|
| 1. 主要指標 | 1 |
| 2. 略 史 | 4 |
| 3. 政治、外交 | 6 |
| 4. 経済事情 | 9 |
| 5. 我が国との関係 | 15 |

II 生活事情

| | |
|-------------------|----|
| 1. 食生活 | 21 |
| 2. 衣 料 | 24 |
| 3. 住 宅 | 26 |
| 4. 医 療 | 28 |
| 5. 教 育 | 32 |
| 6. 家庭の使用人 | 34 |
| 7. 交通事情 | 37 |
| 8. 通 信 | 40 |
| 9. マスコミ | 42 |
| 10. 教養、娯楽、趣味、スポーツ | 43 |
| 11. その他のサービス | 47 |
| 12. 観 光 | 48 |
| 13. 治安、緊急時の心得 | 50 |
| 14. 出入国手続および帰国手続 | 52 |
| 15. 私財の輸送、引き取り、購入 | 56 |
| 16. 社 交 | 58 |
| 17. 任国官公庁 | 59 |
| 18. 在外日本関係機関など | 60 |
| 19. 地方都市 | 61 |

I 一般事情

1. 主要指標

| | | |
|-----|----|--|
| 1-1 | 国名 | ナイジェリア連邦共和国 Federal Republic of Nigeria |
| 1-2 | 独立 | 1960年10月1日 |
| 1-3 | 首都 | アブジャ Abuja |
| | | 人口 約 410万人 (1987年) |
| 1-4 | 面積 | 92万 3,768平方キロメートル (日本の約 2.5倍) |
| 1-5 | 気候 | 全般的に低地であり、北緯 4度から14度の間の熱帯に位置するため、気温は年間を通して高く、かつ多湿であることが特徴である。季節は雨季 (4~10月) と乾季 (11~ 3月) に分けられ、ギニア湾から高温多湿気団の北上する間が雨季、サハラ砂漠から高温乾燥気団の南下する間が乾季となる。しかし緯度は南から北へ10度にわたるため、南岸のラゴス市と北部のカノ市における最高・最低気温および降雨量は表 1のようになっている。一般に雨の多い 7、8月、および 1月のハマターン期 (泥塵の飛来する時期) には、日射の減少により気温は低下する。また 1日のなかでも朝の気温はわりあい低い。年間を通じ、日中の平均気温は30℃くらいである。 |

表 1 ラゴスとカノの気温、雨量の比較

| 月別 | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
|-----|---------|----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|----|
| ラゴス | 最高気温(℃) | 33 | 33 | 33 | 34 | 33 | 31 | 30 | 30 | 31 | 31 | 33 | 33 |
| | 最低気温(℃) | 20 | 22 | 22 | 22 | 22 | 22 | 22 | 21 | 22 | 21 | 22 | 21 |
| | 雨量(ミリ) | 28 | 46 | 102 | 147 | 279 | 462 | 264 | 66 | 140 | 206 | 71 | 25 |
| カノ | 最高気温(℃) | 36 | 38 | 41 | 42 | 41 | 38 | 34 | 33 | 34 | 35 | 37 | 35 |
| | 最低気温(℃) | 9 | 11 | 14 | 19 | 21 | 19 | 19 | 18 | 19 | 16 | 13 | 11 |
| | 雨量(ミリ) | 0 | 0 | 3 | 8 | 69 | 119 | 208 | 312 | 140 | 13 | 0 | 0 |

- 1-6 人 口 1億 920万人 (1989年推定)
人口密度 1平方キロメートル当たり 118.2人
人口増加率 3.4% (1985年)
- 1-7 人種構成 250以上の部族より成る。主な部族としてハウサ・ラフニ族 (27%)、ヨルバ族 (16%)、イボ族 (17%) があげられる。
- 1-8 言 語 英語 (公用語)、ハウサ語、ヨルバ語、イボ語など
- 1-9 宗 教 イスラム教 (50%。北部、南西部)、キリスト教 (35%。南東部、南西部)、伝統的宗教 (全域)
- 1-10 政 治
- (1) 政 体 連邦共和制
- (2) 元 首 イブラヒム・ババンギダ大統領兼軍最高司令官 (Ibrahim Babangida)
- (3) 議 会 軍事独裁制
- (4) 政 党 社会民主党 (SDP)、国民共和会議 (NRC)
- 1-11 経 済
- (1) GNP 51億 3,400万ドル (1989年)
1人当たり 400ドル (1989年)
- (2) 主要産業 鉱業：石油、錫、コロンバイト、石炭、天然ガス
農業：ココア、パーム核、パーム油、落花生、綿花、ゴム
畜産品：牛
- (3) 貿 易 輸出 (FOB) 81億 3,500万ドル (1989年)
輸入 (FOB) 52億 9,100万ドル (1989年)
- (4) 財 政 歳入 687億 3,000万ナイラ (1991年予算)
歳出 386億 6,600万ナイラ (1991年予算)
- (5) 通 貨 通貨単位 ナイラ (Naira)
1ナイラ = 100Kobo(s)
為替相場 1ドル = 10.780ナイラ (1991年 8月末)
- (6) 外貨準備高 38億 6,400万ドル (1990年)
- (7) 対外債務 328億 3,200万ドル (1989年末)
- 1-12 日本との時差 日本との時差は 9時間で、日本の正午はナイジェリアでは午前 3時である。
- 1-13 祝 祭 日
- 1月 1日 新年
- 4月 13日 聖金曜日
- 4月 16日 イースターマンデー
- 4月 29日 断食明け祭日
- 5月 1日 メーデー
- 5月 27日 子供の日
- 7月 3～ 4日 犠牲祭

| | |
|--------|----------|
| 10月 1日 | 独立記念日 |
| 10月11日 | マホメット生誕日 |
| 12月25日 | クリスマス |
| 12月26日 | ボクシングデー |

2. 略 史

15世紀末葉から16世紀にかけてポルトガル人などヨーロッパ人が来航し、キリスト教文化をはじめてナイジェリアの地に持ち込んだ。17世紀以降は奴隷貿易が盛んになり、1807年にイギリス政府が禁止するまで続けられた。

イギリスは奴隷貿易にかわる商業貿易を開拓するため1861年ラゴスを武力占領、植民地化して橋頭堡を築き、その後90年には北部ナイジェリア保護領を、また1900年には南部ナイジェリア保護領をそれぞれ設置して、着々と勢力を伸ばした。14年に南北両保護領が統一され、イギリス領ナイジェリアが成立した。

1930～40年代に植民地支配に対する反対運動が活発化し、なかならず知識人の間で政治的独立の要求運動が高揚した。これに応え、46年および51年にそれぞれ「リチャード憲法」および「マクマファーソン憲法」が制定され、その間、地方議会の開設とその権限の漸進的拡大、またナイジェリア人大臣登用などにみられるようにナイジェリア人の政治参加の度合いはしだいに高まっていった。その後、連邦閣僚会議（閣僚は全員ナイジェリア人）の成立（57年）を経て、60年10月、ドイツ領のカメルーン北部を併合しつつ、ナイジェリアは英連邦の一員として独立した。

独立後 3年を経て、ナイジェリアは1963年10月、北部、東部、西部、中西部の 4州により成る連邦共和国となり、初代アジキウェ大統領が就任した。しかし、ハウサ、イボ、ヨルバの 3大部族を背景とする 3大政党の対立により不安定な政情が続き、66年にはついに軍事クーデターが発生、イロンシ将軍（東部イボ族出身）を首班とする軍事政権が成立した。

しかし、イロンシ政権は、官吏・軍人登用における極端なイボ族優先主義と、そのあまりに急激な改革のため反対派の反感を買い、1966年 7月暗殺され、かわってゴウォン将軍が政権を掌握した。

少数部族出身のゴウォン将軍は、各地区の部族間の確執の除去を目指して連邦を12の州に分割するなど、国家の統一に努めた。しかし、北部出身軍人により南部出身の商人・官吏などが殺害される事件まで発生するなど、部族間対立はいつこうに鎮静せず、ついに1967年 5月、東部州軍政長官オジュクは東部ピアフラの独立を宣言、同年 7月には連邦政府軍との間で全面戦争に突入した。（ピアフラ戦争）

ピアフラ戦争はアフリカ統一機構（OAU）などの調停努力にもかかわらず、1970年 1月のピアフラ側の降伏まで約 2年半の長きにわたり続き、餓死者だけで 100万人を超える惨劇となった。

ピアフラ戦争終結後、ゴウォン将軍は1979年における民政移管の方針を打ち出す一方、軍の再編成、経済開発計画の推進、新憲法の発布など 9項目の実施を目標に掲げ、国家の復興と政治の安定化に努めた。しかし国内体制の不備を理由として同政権が民政移管の無期延期を決定したことに加え、急速な石油開発に伴う経済の膨張とゆがみ、政治家の腐敗の表面化などにより国民の不満を買い、75年無血クーデターにより転覆された。

かわって国家元首の座についたモammed将軍は、公務員 1万人を削減するなど行政組織の縮小をはかるとともに、首都ラゴスをアブジャに移転する計画を発表し、12州を19州に再分割するなど果敢な政策を掲げ、国民の支持を得たが、1976年 2月、

反対派軍人によるクーデター未遂事件の際に落命した。

殺害されたモハメッド将軍の後継者に指名されたオバサンジョ将軍（モハメッドの直系部下）は前モハメッド政権と同様、経済成長と民政の安定に重きをおく政策を進める一方、前政権時代に定められた民政移管予定期日（1979年10月）を変更することなく、着々とその準備を進めた。かくして制憲議会開設、憲法公布、政治活動解禁、国民議会議員・大統領選挙を経て、ナイジェリアは79年10月、13年間の軍政にピリオドを打ち、民政への移管を完了した。

民政移管により、1979年10月政権の座についたシャガリ大統領は、小数与党ナイジェリア国民党（NPN）を背景に、宗教暴動、ナイジェリア国際通信局など公共建物の放火事件の発生、不法滞在外国人の国外追放措置など国政運営上困難な事態に直面したものの、いちおう安定的に推移し、83年8月より約1ヵ月にわたり大統領選挙など各種国内選挙を実施した。この選挙では同大統領は大差をつけて再選を果たし、また与党NPNも圧勝した。同10月1日、同大統領は第2期目大統領として就任し、以後組閣人事を進めシャガリ第2期政権が順調に始動したかに思われた。しかし、経済状況の悪化を背景として同12月31日早朝、軍部によるクーデターが奏功し、同政権は崩壊、ナイジェリアでは4年あまりにわたった民主政治に終止符が打たれた。

かわって登場したブハリ軍事政権も、1985年8月下旬国民の不满を背景に起こった軍部反対派によるクーデターにより失脚し、あらたにババンギダ陸軍少将を首班とする軍事政権が成立した。ババンギダ少将は大統領に就任するとともに新設の軍事統治評議会（AFRC）議長に就任した。

3. 政治、外交

3-1 最近の政情

1985年の8月の軍事クーデター以来ババンギダ大統領は、国内に根強い部族間対立や累積債務問題などをかかえつつも約6年間の長期にわたり政策を担ってきた。同大統領は、すでに87年7月に民政移管法を公布し、92年中の民政移管を公約している。(民政移管に関しては憲法が改正され、民政が憲法上明記される予定である)

同大統領は、3大部族(北部のハウサ族:イスラム教、東南部のイボ族:キリスト教、南西部のヨルバ族:現地宗教)の部族政党結成を避けるため、2政党制を導入することとし、すでに1989年10月に大統領指導のもとで中道左派の社会民主党(SDP)と中道右派の国民共和会議(NRC)が創設された。90年3月には、政府公認政党であるSDPとNRCに多数の国民が党員登録を行なった。(NRC:496万人、SDP:470万人)同年12月にはババンギダ政権になってはじめての政党制度による選挙として、438の地方自治体について首長と議員の統一地方選挙が実施され、SDPが232地区の首長、2,934議席を獲得し、206地区、2,558議席を得たNRCをわずかながら上回った。今後、91年第4四半期には州知事、州議会選挙が、92年には連邦議会議員選挙、大統領選挙が予定されている。

なお、民政移管に際しては、大統領も含めた現職閣僚の立候補を認めない措置を発表している。しかしながら、民政移管プログラムにも複雑な部族対立、宗教対立は微妙な影響を与えており、こうしたなかで政治的影響力を持つハウサ族、経済的影響力を持つイボ族、若干少数派のヨルバ族の3大部族を安定的に治めていくためには、バランスのとれた政治的配慮が必要とされている。こうしたことから、1991年の10月に実施が予定されている人口センサスは、その結果として各部族の人口・勢力が明確になるため、今後の政策運営に重大な意味を持つものと思われる。

一方、内政面をみると、まったく不安材料がないわけではない。その理由としては、根深い部族対立、1986年9月に開始されて以来5年目に入った構造調整計画(SAP)導入による経済の引き締め政策と、それに伴う物価の上昇・雇用の悪化などからの国民の不満などがあげられる。90年4月には、陸軍の中南部出身者を中心としたクーデターが発生したが、まもなく鎮圧された。また、湾岸危機に際しては、政府が国連決議支持を表明していたにもかかわらず、国民の過半数を占めるイスラム教徒はイラクを支持したことから、多国籍軍側である英米人居住者が国外に脱出するなど緊張が高まった。91年4月には、北部のパウチ州で80人以上のキリスト教徒がイスラム教徒に殺害される事件も発生した。

1990年8月、最高政策決定機関である軍事統治評議会(AFRC)と内閣に相当する閣僚評議会の改造が発表された。その特徴としては、副大統領ポストの新設(アイコム参謀総長が就任)、閣僚ポストへの民間人の積極登用(26人中16人)などがあげられる。また、ファラエ大蔵・経済開発相の更迭(リスケ

ジュール交渉打開のためであったといわれる)。後任はアルハジ前予算・計画相、およびルクマン外相の更迭(ヌワチュク新外相はキリスト教徒であり、同教徒への配慮があったためといわれる)も行なわれた。なお、ファラエ前蔵相は12月にSDPへ入党し、8月に辞任したマンマン前農業・天然資源相(後任はムスタファ氏)と同様に、大統領選挙に立候補する意向と伝えられている。

3-2 外 交

ナイジェリアは、西側寄り非同盟という基本的外交路線は維持しつつ、アフリカ統一機構(OAU)および西アフリカ諸国経済共同体(ECOWAS)の有力な一員として、近隣諸国との関係改善や近隣の地域紛争の平和的解決に関して積極的外交を展開している。同国は最大(人口1億人以上)の黒人国家としての自負からアフリカにおいて指導的役割を果たすことを希望し、アフリカを代表して発言するとの姿勢を有している。反アパルトヘイト問題についても、ブラック・アフリカを代表するとの立場から厳しい発言を行なっている。このことは、1988年12月の国連における「対南ア包括的強制制裁決議」の対日非難に関連したナイジェリアのガルバ国連代表(第44回国連総会議長)の行動と発言にも現われている。ただし、南アフリカ問題についての立場の相違により、西側諸国との関係が悪化するとともに被害を被るのは自分達の側であることをナイジェリアも理解しており、原則は原則として主張するが、そのために関係が悪化することのないよう配慮を行なっている。

外交基盤の強化という観点からアフリカ諸国、特に西アフリカ諸国との関係促進のため積極的なアフリカ域内外交を進めてきたナイジェリア政府は、厳しい国内経済情勢を反映して、1988年以降は外交政策においても現実的に経済面での協力・支援の確保を重視する方向を打ち出してきており、日本を含む先進国に対するいわゆる「経済外交」が活発化している。

特に注目されるのは、旧宗主国たるイギリスと1986年以来ナイジェリアにとって最大の援助国となった我が国との関係である。ババンギダ大統領は89年5月9日から12日まで国賓としてイギリスを訪問した(ババンギダ大統領がアフリカ外の国を国家元首として公式に訪問するのは、89年2月の大喪の礼出席のため訪日したのを除けばはじめてのこと)が、このことは、一時険悪であったイギリスとナイジェリアの関係が顕著に改善されてきていることを印象づけた点で意義深い。両国の関係改善に伴いイギリスは、88年12月にナイジェリアの構造調整計画を支援するため、1億ドルの無償供与を行なう用意がある旨発表し(公式訪問直前に取決めに署名)、89年1月に開かれた非公式の援助国会合に積極的に対処するなどナイジェリアに対する支援の姿勢を強めている。

なお、他の先進諸国に関しては、1989年7月に予定されていたババンギダ大統領のフランス訪問は、同年5月、6月の暴動騒ぎもあって延期され、ようやく90年の2月に実現した。訪米に関しては、88年にアメリカがババンギダ大統領を国賓として受け入れる用意がある旨表明したが、ナイジェリア側が具体的な時期を示さなかったため立ち消えとなり、その後、90年1月に訪米ということで両国の間で準備がなされていたが、89年12月末に軍事統治評議会および国家

閣僚評議会の大幅な改造がなされたこともあってか、直前になって中止が発表された。このように、92年の民政移管を控え、内政上の理由により、外交日程が変更されることも少なくない。

4. 経済事情

4-1 概 観

アフリカ最大の産油量（1989年日産 161万バレル）を誇るOPEC加盟国であり、70年代を通じ経済は急速に成長した。79年および80年には最高潮に達したが、80年代に入ってから世界的な景気後退、オイル・グラットに見舞われ、輸出不振による外貨収入不足、財政困難、開発資金不足に陥り、GDP実質成長率も81年以降マイナス基調となった。

経済の停滞により、対外債務は1988年末には 315億ドルに達し、アフリカ最大になり、また、かつて 900ドル近くあった 1人当たりGNPは、石油収入の減少および通貨ナイラの下落により、88年には約 300ドルにまで下がった。

1981年にGDPの15.5%を占めていた石油部門は落ち込みが激しいが、石油にかわる輸出品がないことから、外貨収入に占める石油シェアは90年でも80%と高い割合を占めている。

このような経済困難を克服するため、厳しい輸入抑制策、物価・賃金の統制策をはじめ超緊縮政策を実施し、1985年後半からの原油価格下落を踏まえ、86年からは世銀・IMFの協力を得て構造調整計画（SAP）に着手した。

SAPに基づいて、為替レートの切下げ、輸入許可制度の撤廃などによる市場の活発化、公社・公団などの民営化の推進による財政赤字の削減に努めてきた。この結果、油価が上昇したことともあいまって、1987年以降GDP成長率は、プラス成長に転じ、90年には石油の増産・油価の上昇に伴う財政好転、インフレ抑制、債務繰延べ交渉の進展などにより、実質GDP成長率はほぼ前年度並みの 5.2%という高成長となった。（石油部門成長率は12.4%）

一方、SAPについては第 1次計画（1986年 9月～88年 6月）が終了し、89年 1月以降第 2次計画が、効率性の改善、石油依存度の削減、経済の多様化の促進、対外要因に左右されない経済構造の確立を主要目標として引き継いでいる。SAPは92年の民政移管後も継続される見通しである。また、90年 1月には、新経済計画（15～20年にわたる長期計画と、各年の予算に合わせて 3年間の経済開発計画を作成するローリングプランから成る）が発表された。現行のローリングプランの優先分野としては、遂行中のプロジェクトの完成と新規プロジェクトの実施、インフラの整備、農業の開発、中小企業振興の 4つがあげられている。

1990年 8月に発生した湾岸危機は、ナイジェリアに石油価格の上昇に伴う歳入の増加をもたらしたが、OPEC諸国の増産により91年に入ると原油価格は下落した。

また、ナイジェリアは1990年12月に外国為替管理制度を変更し、ダッチ方式（高いレートで入札した市中銀行が外貨を獲得する方式）とした。現在の為替レートは、1ドル＝約10ナイラにまで達しており、従来の輸入依存型の諸産業には厳しい状況となっている。

消費者物価上昇率については、SAPによる為替の大幅な切下げ（1986年：1ドル＝ 1.755ナイラ、88年： 4.537ナイラ、90年： 8.038ナイラ）、公共料

金の引上げなどにより89年には年率40.9%にまで達していたが、財政・金融政策の引締め、為替切下げ速度の鈍化、食料品価格の安定などの結果、90年には年率15.0%にまで抑制された模様である。

対外債務管理は、1990年も引き続きナイジェリアにとって大きな課題であった。総債務残高は89年末には328億ドルであったが、90年末には340億ドル程度に達した模様である。一方、債務繰延べなどの努力は続けられており、90年1月にはパリ・クラブで第2次リスケジュールについて合意がなされた。また、91年1月にはIMFとの間でスタンプバイ交渉が総額3億1,900万SDR（約4億5,000万ドル）、期間15ヵ月（92年3月満期）で妥結した。（ナイジェリアは、これまでに2度、スタンプバイクレジットをまったく引き出さずに期限満了に至っており、今回もこれまでと同様まったく引き出しを行なわないのではないかとの観測も一部にはある）パリ・クラブでも同月第3次公的債務繰延べについて合意したが、当国政府が要請していたトロントスキームの適用は見送られ、結局、低中所得国向けに準じた条件（ODA、ローン：20年繰延べ、うち据え置き10年、その他：15年繰延べ、うち据え置き8年）を適用することで決着した。ロンドン・クラブでは、91年3月に金利の削減（6.25%の固定金利30年もの国債への等価交換）、パイバック（湾岸危機によって増加した石油収入を背景にかねてより提案していたもので、削減率は60%前後）、およびニューマネー（対象債務の10%：金利：LIBOR プラス 1%）の3点からの選択で合意した。

4-2 産 業

ナイジェリアは元来、ココア、コーヒー、パーム、ゴムなどの農産品の輸出収入に依存する農業国であるが、1970年代に入ってから産油国として台頭し、膨大な原油輸出収入を背景に石油精製、石油化学、製鉄などの工業プロジェクトを中心に工業化が進められた。

この結果、石油採掘・石油精製などの生産がGNPの約20%を占め、原油輸出による外貨収入は総輸出の95%を占めるとともに、連邦政府財政収入の70～80%を賄っており、現在のナイジェリアは石油依存の経済体質に変じている。

1990年の石油生産量は、湾岸危機の影響からOPEC内の合意に従って90年7月まで日産170万バレルであったものが、8月以降増産し、同年12月には日産190万バレルにまで達した。その結果90年平均は日産180万4,000バレルとなって対前年度比11.2%増（89年は日産162万2,000バレル）であったが、現在は日産161万1,000バレル程度に落ちている。ナイジェリアは、石油部門における重点政策として、①石油探査の推進、②天然ガスの利用、③輸出用各精油所間のパイプラインの建設、④ターミナルの建設、⑤石油化学分野の強化の5項目を掲げている。政府は、この政策実現に要する多額の費用調達のために、外資の参加を積極的に呼びかけている。90年も、5月には東南部のポートハーコートに近いアレサ・エレメ石油化学プラントが、6月にはアクア・イボン州の沖合35キロメートルに位置するオソ・コンデンセート・プロジェクトが、それぞれ開発契約の調印に至るなど大型プロジェクトの着手が続いている。

農業は、石油関連産業がナイジェリア経済の基幹になっているとはいえGNPへの寄与は大きく、1980年代では20～25%に達する。また、人口の約60%は農業部門で働いている。しかし、同国の人口約1億人の食糧を賅うには食糧生産は十分ではなく、毎年大量の食糧を輸入せざるを得ない事情におかれている。

表1 産業別GDPの構成 (単位：10億ライナ、%)

| | 1986年 | | 1989年 | |
|------------|-------|-------|-------|-------|
| | 金額 | 構成比 | 金額 | 構成比 |
| 農畜林水産業 | 31.21 | 40.1 | 34.36 | 40.0 |
| 原油 | 11.38 | 14.6 | 11.33 | 13.2 |
| その他の鉱業・採石業 | 0.38 | 0.5 | 0.49 | 0.6 |
| 製造業 | 7.34 | 9.4 | 8.48 | 9.9 |
| 公益事業 | 0.37 | 0.5 | 0.35 | 0.4 |
| 建設 | 1.27 | 1.6 | 1.20 | 1.4 |
| 運輸 | 2.70 | 3.5 | 2.88 | 3.4 |
| 通信 | 0.24 | 0.3 | 0.25 | 0.3 |
| 卸小売 | 12.08 | 15.5 | 14.59 | 17.0 |
| ホテル・飲食業 | 0.70 | 0.9 | 0.74 | 0.9 |
| 金融・保険 | 2.42 | 3.1 | 3.08 | 3.6 |
| 不動産・実業サービス | 0.25 | 0.3 | 0.26 | 0.3 |
| 家屋 | 1.95 | 2.5 | 2.06 | 2.4 |
| 政府サービス | 5.02 | 6.4 | 5.09 | 5.9 |
| その他 | 0.63 | 0.8 | 0.66 | 0.8 |
| 要素費用によるGDP | 77.90 | 100.0 | 85.82 | 100.0 |

4-3 財政

国家の財政収入の70%以上は、原油輸出によって賄われている。政府は原油の海外需要および価格変化に伴う財政収入の不安定から脱却するため他の財源を求めているが、めどが立っていない。赤字分はこれまで内外の借入れ分で処理してきたが、海外借入れがますます困難になっており、国内借入れへの依存度を高めている。

政府は赤字削減のため公務員、軍人の賃金凍結、石油補助分カット、新規プロジェクトの凍結などで財政支出圧縮化に努めたが、1985年末以降の原油価格低下で、これらの措置も焼け石に水であった。

1988年1月には賃金凍結が解除されたものの、2月には国際電話料金の値上げ、さらには石油製品の大幅値上げが予定された(後に廃止)など、政府は財

源の確保に必死であるが、原油価格が軟調気味に推移しているため、財政収入はいっそう不安定なものとなった。

しかし、1989年の財政収入は構造調整計画の推進、原油の増産および油価の堅調な推移による輸出額の大幅な伸びにより、当初予算の294億ナイラを209億ナイラ上回る503億ナイラとなった。一方、支出は収入の大幅な伸びにもかかわらず、政府の支出抑制政策により当初予算の301億ナイラを109億ナイラ上回る410億ナイラにとどまった。

4-4 貿易、国際収支

(1) 貿易

ナイジェリアの貿易は輸出総額の90%以上を原油に依存しており、その他の輸出品はココア、コーヒー、パーム油などごくわずかの1次産品である。

また、輸入は原油輸出で稼いだ外貨で賄われ、日用品、耐久消費財から産業用機材に至るまで広範にわたる。

1989年の貿易額（連邦統計局発表）は輸出が599億2,880万ナイラ（前年比92.1%増）、輸入が251億7,760万ナイラ（42.7%増）で、貿易黒字額は347億5,120万ナイラと前年の約2.5倍と著しく増した。ただし、この間ナイラの対ドルレートは88年末に1ドル=5.3364ナイラから89年末には7.6500ナイラと大幅に切り下がったため、実質的な伸びは割り引いて考慮する必要がある。依然として主要輸出品目は石油であり、その比率は93.3%を占める。石油輸出の増大は国際市況における価格上昇と輸出量の増大による。非石油製品の輸出は、前年比45.2%増の40億350万ナイラにとどまった。品目では、食料品が26.8%減の12億2,950万ナイラと大幅に縮小した一方で、燃料を除く非食料用原材料は4.7倍の18億4,700万ナイラと伸長した。この拡大は、シンガポールを中心に出荷された天然ゴムが大きく寄与しているとみられる。そのほか、雑貨が16.7倍の1億4,840万ナイラを記録した。

輸入は、機械・輸送機器が前年比40.9%の100億8,630万ナイラ、化学品は69.1%増の57億4,520万ナイラ、原材料別製品は35.6%増の53億3,700万ナイラとなっている。また、食料品は14.0%増の17億2,070万ナイラで、輸入総額に占めるシェアは8.6%から6.8%に縮小した。これは、1989年初めの為替管理制度の変更や4月以降の金融引締め政策などで外貨の獲得に支障を生じたことが反映している。

輸出先では、最大輸出相手国のアメリカが、314億5,500万ナイラ（前年比2.2倍）で全体の52.5%のシェアを有している。次いでスペイン、オランダと続き、1988年に比べ第2、3位の順位を逆転させた。輸入先は西ドイツが43億5,610万ナイラで輸入総額の17.3%を占め第1位である。これにイギリス、アメリカと続く。また、アフリカ近隣諸国に対する貿易は拡大している。

表2 輸出入の推移

(単位：100万ナイラ)

| | 1984年 | 1985年 | 1986年 | 1987年 | 1988年 | 1989年 |
|----------|-------|--------|-------|--------|--------|--------|
| 輸出 (FOB) | 9,088 | 11,721 | 8,921 | 30,361 | 31,193 | 57,971 |
| 石油部門 | 8,841 | 11,224 | 8,369 | 28,209 | 29,293 | 55,017 |
| 輸入 (CIF) | 7,178 | 7,063 | 5,984 | 17,862 | 21,446 | 30,860 |
| バランス | 1,910 | 4,658 | 2,937 | 12,499 | 9,747 | 27,111 |

(注) 1989年は暫定値。

(2) 国際収支

1980年代に入って、国際収支は赤字基調である。その主要因は貿易外収支および移転収支の赤字にある。また、81年以降の海外原油需要の減少による、原油輸出の伸び悩みに見合った輸入圧縮が十分行なわれていないためともいえる。

海外からのローン返済、貿易代金の支払いを抑えているので数字上は表面化していないが、もし支払うべきものを全額支払うと、国際収支の赤字額はさらに増大する。

表3 国別輸出

(単位：100万ナイラ)

| | 1988年 | 1989年 |
|------|----------|----------|
| アメリカ | 14,337.6 | 31,455.0 |
| スペイン | 2,908.0 | 6,349.5 |
| オランダ | 3,904.3 | 4,785.1 |
| フランス | 2,192.0 | 2,519.8 |
| 西ドイツ | 2,104.5 | 2,453.6 |
| イタリア | 339.3 | 2,366.6 |
| イギリス | 591.0 | 1,038.5 |
| ブラジル | 506.9 | 601.3 |
| 日本 | 37.3 | 133.3 |
| カナダ | 456.9 | 119.9 |
| 総額 | 31,192.8 | 59,928.8 |

表4 国別輸入
(単位：100万ナイラ)

| | 1988年 | 1989年 |
|------|----------|----------|
| 西ドイツ | 2,698.2 | 4,356.1 |
| イギリス | 2,793.5 | 4,097.6 |
| アメリカ | 1,852.5 | 3,093.9 |
| フランス | 1,599.5 | 2,000.2 |
| 日 本 | 1,314.4 | 1,707.8 |
| イタリア | 802.5 | 1,362.7 |
| オランダ | 691.2 | 979.4 |
| ブラジル | 686.6 | 787.6 |
| スペイン | 214.1 | 328.5 |
| カナダ | 75.3 | 131.7 |
| 総 額 | 17,645.1 | 25,177.6 |

表5 国際収支表 (単位：100万ドル)

| | 1985年 | 1986年 | 1987年 | 1988年 | 1989年 |
|------------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 経常勘定 | 2,566 | 366 | ▲69 | ▲194 | ▲143 |
| 貿易収支 (FOB) | 5,616 | 2,313 | 3,448 | 2,626 | 2,844 |
| その他財貨・サービス | ▲2,795 | ▲1,835 | ▲3,492 | ▲2,808 | ▲3,080 |
| 移転収支 | ▲256 | ▲113 | ▲24 | ▲12 | 92 |
| 民間 | ▲254 | ▲108 | ▲19 | ▲3 | ▲19 |
| 政府 | ▲2 | ▲5 | ▲5 | 2 | 111 |
| 直接投資 | 478 | 167 | 603 | 377 | 2,082 |
| 間接投資 | - | - | ▲535 | ▲65 | ▲220 |
| その他資本 | ▲4,142 | ▲1,358 | ▲4,188 | ▲4,857 | ▲631 |
| 誤差・脱漏 | ▲134 | ▲161 | ▲306 | ▲215 | ▲1,252 |
| 収支合計 | ▲1,232 | ▲986 | ▲4,495 | ▲4,954 | ▲164 |

5. 我が国との関係

5-1 政治、外交

我が国はナイジェリアを1960年10月1日の独立と同時に承認し、同年12月に大使館を開設した。爾来、同国と友好協力関係を維持してきている。ナイジェリアは地理上、我が国からもっとも遠い地域のひとつに位置するため、歴史上我が国との交流はほとんどなかったが、独立の翌年には最初の合弁企業

(Northern Textiles Manufactures Ltd.) が設立され、70年代の石油ブームとともに多くの日本企業がナイジェリアに進出し、経済の分野において両国間の交流が高まった。80年代に入って石油価格の下落がナイジェリア経済に深刻な影響を与えたこともあり、在留邦人の数も減少傾向にあるが、89年10月現在、合弁企業40社、駐在員事務所2社、技術提携2社が存在し、259人の邦人が長期滞在している。

近年ナイジェリア政府の要人が相次いで来日しており、1989年2月の大喪の礼に際しては、ババンギダ大統領をはじめ多くの政府関係者が来日するなど、人物交流の面において目をみはるものがある。我が国からは、88年11月に第3回目の政府派遣アフリカ経済使節団(牧アフリカ委員長を団長)がナイジェリアを訪問し、両国の経済関係振興に努めている。民間レベルの交流についても、88年8月には本邦より民間人による砂漠化防止のための植林ツアーが企画され、ナイジェリア北部の都市カドゥナを訪れるなど活発になりつつある。

5-2 経済、貿易

1990年の対日貿易は、輸出が食料品(エビ)を中心として、約1,500万ドル(89年は約500万ドル)、輸入は機械、金属品を中心に約2億7,000万ドル(89年は約2億6,600万ドル)であった。日本は現在ナイジェリアからの石油輸入を行っていないが、10月に同国を訪れた日本・ナイジェリア協会のミッションが、ナイジェリア政府と原油および石油製品の対日輸出について話し合いを行ない、当国の原油を輸入する協定を結び、10月だけ約13万2,000バレルの輸入を行なった。

表1 対ナイジェリア輸出 (単位：1,000ドル)

| | 1988年 | 1989年 | 1990年 |
|-----------|---------|---------|---------|
| 総輸出額 | 307,977 | 266,156 | 269,108 |
| 軽工業品 | 21,665 | 20,847 | 22,142 |
| 重化学工業品 | 284,512 | 241,599 | 245,550 |
| 化学品 | 8,717 | 8,715 | 5,221 |
| 金属品 | 99,103 | 64,647 | 76,663 |
| 機械機器 | 176,692 | 168,237 | 163,667 |
| 一般機器 | 78,189 | 80,065 | 70,443 |
| 電気機器 | 55,889 | 40,637 | 36,742 |
| 輸送機器 | 40,012 | 45,099 | 53,541 |
| 精密機器 | 2,602 | 2,435 | 2,940 |
| 再輸出・特殊取扱品 | 532 | 2,248 | 1,113 |

5-3 経済・技術協力

我が国は、ナイジェリアがアフリカ最大の人口を有する大国であり、アフリカ統一機構(OAU)や西アフリカ諸国経済共同体(ECOWAS)で指導的立場にあること、我が国と緊密な関係にあることなどから、重点国として位置づけている。

特に、農業の再建による食糧自給率の向上と生産の増大などを目的とした食糧・農業分野、地方住民のための飲料水確保などを目的とした水供給分野などの基礎生活分野および構造調整努力の支援を重視して援助を実施している。

1990年度までの我が国の援助累計実績についてみると、有償資金協力は709億円でケニアに次ぎ域内第2位(交換公文ベース)、技術協力は69億円で域内第7位(JICA経費実績ベース)と、主に有償資金協力および技術協力によって積極的な協力を行なってきた。しかし、所得水準の低下により86年度から一般無償の適格国となったこと、累積債務問題を含む経済情勢が悪化していることなどから、近年は無償資金協力の比重が増大している。

1990年の我が国の支出純額は7,874万ドルで、ケニア、セネガルに次ぎ域内第3位である。各援助形態のシェアは、構造調整借款の支出が進んだことから、有償資金協力65.4%、無償資金協力25.9%、技術協力8.6%となっている。

有償資金協力については、1981年度までに農業、運輸・交通、エネルギーなどの分野に対し供与した。その後、同国の経済状況の悪化により、88年度および89年度に債務繰延べを行なうとともに、構造調整努力を支援するため88年度に「貿易投資政策調整計画」に対し円借款250億円を供与した。

無償資金協力については、1985年度まではナイジェリアの1人当たりGNPが比較的高い水準にあったことから、水産無償援助および文化無償援助の実施

にとどまっていたが、86年度以降、食糧増産援助、農業、水供給など基礎生活分野を中心に援助を拡充している。また、88年度および89年度には、構造調整支援のためのノンプロジェクト無償援助として合計55億円を供与した。

技術協力については、保健・医療、工業、農業などの分野に研修員受入れ、専門家派遣などを実施している。

表2 我が国のODA実績

(支出純額、単位：100万ドル)

| 暦年 | 贈与 | | | 政府貸付 | | 合計 |
|----|---------------|---------------|----------------|--------|----------------|-----------------|
| | 無償資金協力 | 技術協力 | 計 | 支出総額 | 支出純額 | |
| 86 | — (—) | 2.75(21) | 2.75(21) | 15.20 | 10.21(79) | 12.96(100) |
| 87 | 7.46(42) | 5.63(31) | 13.09(73) | 5.56 | 4.87(27) | 17.96(100) |
| 88 | 25.24(47) | 7.60(14) | 32.84(61) | 22.51 | 20.94(39) | 53.78(100) |
| 89 | 12.27(7) | 6.31(4) | 18.58(11) | 160.34 | 147.28 (89) | 165.86 (100) |
| 90 | 20.39(26) | 6.80(9) | 27.19(35) | 55.59 | 51.55(65) | 78.74(100) |
| 累計 | 70.56 (16) | 46.29 (11) | 116.85 (27) | 375.33 | 311.98 (73) | 428.83 (100) |

(注) カッコ内は、我が国2国間ODA各形態別総計に占める割合(%)。

表3 年度別・形態別実績

(単位：億円)

| 年度 | 有償資金協力 | 無償資金協力 | 技術協力 |
|----------------------|---|---|---|
| 1985年度 までの 累 計 | 401.00億円 第1次円借款(66年度： 108.00) アレワ紡績工場拡張 (12.60) ユニテックス工場拡 張 (15.12) 国鉄拡張 (12.41) ラゴス〜カドゥナ間 同軸ケーブル (65.00) 第2次円借款(72年度： 62.00) カインジ・ダム発電 機(I) (15.02) カインジ・ダム発電 機(II) (24.66) 移設可能変電所 (16.61) 第3次円借款(73年度： 62.00) 国鉄拡張 (62.00) アナンプラ川下流地域 灌漑計画 (81年度：169.00) | 10.03億円 水産振興計画 (80年度：5.00) 教育省に対する理科実 験機材(81年度：0.23) 漁業調査訓練船計画 (83年度：4.80) | 34.49億円 研修員受入れ 473人 専門家派遣 132人 調査団派遣 153人 機材供与 637.0百万円 プロ技協 3件 開発調査 4件 |
| 1986年度 | なし | 12.82億円 海洋調査研究所施設改 善計画 (10.00) 食糧増産援助 (2.50) ナイジェリア国立博物 館に対する文化財保存 ・記録機材 (0.32) | 5.63億円 研修員受入れ 32人 専門家派遣 16人 調査団派遣 14人 機材供与 71.7百万円 プロ技協 1件 |

(単位：億円)

| 年度 | 有償資金協力 | 無償資金協力 | 技術協力 |
|--------|--|--|--|
| 1987年度 | なし | 11.60億円 農業輸送力増強計画 (8.35) 食糧増産援助 (2.50) 災害緊急援助(黄熱病) (20万ドル=0.32) ナイジェリアスポーツ 委員会に対するスポー ツ機材 (0.43) | 7.14億円 研修員受入れ 27人 専門家派遣 18人 調査団派遣 34人 機材供与 20.6百万円 プロ技協 1件 開発調査 1件 |
| 1988年度 | 286.06億円 貿易投資政策調整計画 (250.46) 債務繰延べ (6.04) 債務繰延べ (12.57) 債務繰延べ (16.99) | 37.06億円 ギニア・ウォーム対策 飲料水確保計画(1/2 期) (6.58) ノンプロジェクト援助 (30.00) ラゴス大学に対するL L視聴覚機材 (0.48) | 8.19億円 研修員受入れ 28人 専門家派遣 17人 調査団派遣 40人 機材供与 46.1百万円 プロ技協 1件 開発調査 1件 |
| 1989年度 | 22.15億円 債務繰延べ (6.07) 債務繰延べ (5.28) 債務繰延べ (10.80) | 31.64億円 ギニア・ウォーム対策 飲料水確保計画(2/2期) (3.11) 公共輸送力増強計画 (3.06) ノンプロジェクト援助 (25.00) 国立劇場に対する照明 機材 (0.47) | 7.58億円 研修員受入れ 38人 専門家派遣 12人 調査団派遣 34人 機材供与 61.9百万円 プロ技協 1件 開発調査 1件 |

(以下次ページに続く)

(単位：億円)

| 年度 | 有償資金協力 | 無償資金協力 | 技術協力 |
|----------------------|----------|--|---|
| 1990年度 | なし | 18.31億円 ナイジェー州ギニア・ ウォーム対策飲料水確 保計画(1/2期)(6.84) 連邦漁業専門学校施設 改善計画(1/2期) (8.97) 食糧増産援助(2.50) | 6.44億円 研修員受入れ 33人 専門家派遣 9人 調査団派遣 7人 機材供与 92.6百万円 プロ技協 1件 開発調査 1件 |
| 1990年度 までの 累 計 | 709.21億円 | 121.46億円 | 69.47億円 研修員受入れ 631人 専門家派遣 204人 調査団派遣 282人 機材供与 929.8百万円 プロ技協 4件 開発調査 5件 |

- (注) 1) 「年度」の区分は、有償資金協力は交換公文締結日に、無償資金協力および技術協力は予算年度による。
- 2) 「金額」は、有償資金協力および無償資金協力は交換公文ベースに、技術協力はJICA経費実績ベースによる。

II 生活事情

1. 食生活

1-1 食料

(1) 一般事情

ナイジェリアの農業は、1956年に噴油が発見されて以来、その様相が大きく変化したといわれる。それまでは輸出換金作物として、ココア、パームヤシ、ピーナッツ、綿花、主要作物として、ヤム、トウモロコシ、キャッサバ、ソルガムが作られていた。が、やがて石油関係の産業への急速な発展とともに、人口が都市へ集中した結果、農地は荒廃し、生産力が低下していった。

これに対し、近年、政府は輸入依存を軽減し、自給自足を目標とした構造調整計画（Structural Adjustment Program:SAP）を打ち出し、その一環として農業の奨励をはかっている。それによって、身近な例では、今まで外国製が主だった乳製品や調味料、菓子類、その他に自国製のものが少しずつではあるが増えてきている。

一般食料品については、日本食料品店はない。インスタントラーメン（インドネシア、マレーシア製）、インスタント豆腐、しょうゆ、そうめん（インドネシア製）などをスーパーやマーケットでみかけることがある。缶詰のタケノコ、レンコン、もやしなどはよく出ている。西洋食料品は、ソース、スパイス、各種缶詰類が確実に入手できる。そのほかでは、中華料理、インド料理の材料なども入手可能である。

食品の衛生面については、完全にパックされた製品をスーパーなどで購入する限り問題はないが、やはり火を通してから食べることが望ましい。魚や肉などの冷凍物は、停電により冷解凍を繰り返している可能性もあり、販売店の施設面などを十分考慮して選ぶこと。当地では、冷凍品を過信してはいけない。野菜などは濾過器を通した水で洗った後、消毒液（ミルトン）で処理してから調理している。

(2) 主な食料の出回り状況

米——当国産米はインディカ種が主で、なじみが薄い。収穫後の処理（脱穀、乾燥、精米）が悪く、においがあったり、石が混ざっていたりする。市場などで、タイ米、アメリカ米が売られており、これらは日本人の口にも合うようである。

パン——こちらでは、パンを朝食、間食として食べるため、少し甘めのパンが多い。食パン、フランスパン、クロワッサン、棒パンなどがある。

肉、乳製品——畜産物はほぼ自給体制がとられており、牛、豚、羊、山羊、鶏などが問題なく手に入る。外国人向けの若干の輸入肉も、スーパーなどで買うことができる。また、冷凍肉を20キログラム単位で売る会社があり、邦人何人かで買い分けたりしている。乳製品（牛乳、粉ミルク）は、輸入品、自国製ともに多くあるが、チーズなどは輸入している。

野菜、果物——常時ある野菜はタマネギ、じゃがいも、にんじん、キャベ

ツ、トマト、いんげん豆、きゅうりである。

雨季にある野菜は大根、マッシュルーム（雨季は端境期にあたり、野菜の種類が極端に少なくなる）、乾季にある野菜はナス、カリフラワー、チンゲンサイ、ズッキーニ、レタス、セロリ、オクラ、白菜、ピーマン、ニラ、ヤマイモ、かぼちゃ、ココヤム（さといも類）、かぶである。

果物はマンゴー、オレンジ、グレープフルーツ、バナナ、パイナップル、パパイヤ、スイカ、メロン、アボカド、グアバがある。

魚類——内陸は淡水魚が主で、それを干したり、蒸製にして売られている。ラゴスでは、イカ、エビ、ヒラメ、タイ、スズキなどが水揚げされている。ヴィクトリア島に、鮮魚を購入できる場所が2ヵ所ある。またラゴス本土に魚の卸業者がいて、輸入品の冷凍のアジ、サバ、タラなどを、15、20キログラム単位で買える。

調味料——日本食の調味料は、味の素以外入手できないと思ってよい。その他の中華料理、インド料理、西洋料理の調味料は豊富に揃っている。

食用油——輸入物のコーン油、植物油、オリーブ油などは入手できるが、突然なくなったりするので買い置きは必要である。当国の人は、パームオイルを料理に使っている。

酒——自国産のビールが10種類以上ある。そのほか、輸入品のアルコール類が豊富にある。

飲料水——水道水は濾過、煮沸しない限り飲めない。濾過器はこちらで簡単なものは手に入るが、日本より持参の方がよい。当国産のミネラルウォーター、清涼飲料は特に問題ない。

菓子——スーパーなどでは輸入物、自国製といろいろな種類の菓子が売られている。

(3) 食料の入手

野菜、果物、穀類などは市場で、またスーパーでは日用品とともに肉や缶詰、加工食品、調味料などを入手できる。

U. T. C. Supermarket Leventes Supermarket

Molony Supermarket Bhojsons Supermarket

1-2 食器・調理器具など

(1) 食器・調理器具などの入手

日本食器、調理器具はない。西洋料理用ならば鍋、フライパン、皿、カップ、スプーン、フォークなどいちおう揃っている。電気製品は、ほとんどこちらで買うことができる。アルミ箔、ラップ類も手に入る。

(2) 日本から持参した方がよい食器・調理器具など

和食器——茶わん、飯わん、汁わん、小鉢、どんぶり、急須、茶托、すりばち

調理具——包丁、しゃもじ、皮むき、おろし金、弁当箱

その他——水筒、魔法瓶

ラゴス、カドゥナなどで、日本の益子焼に似た焼きものが作られており、こ

れらは和食器としても使え、手作りの味が楽しめる。

1-3 外 食

(1) 飲食店

日本レストランはない。そのほかは表 1のとおりである。

表 1

| 料理の種類 | 店 名 | 電 話 | 住 所 |
|-------|--|--|---|
| 韓 国 | クリスタル・ルーム | 681402 | 81 Awolowo Rd., Ikoyi, Lagos |
| 中 国 | イコイ・ホテル内 エアポート・ホテル内 エコー・ホリデー・イ ン・ホテル内 ジョーズ | 680505 932051~5 612228 616911 | Kingsway Rd., Ikoyi, Lagos Isheri Rd., Jkeja Kuramo Waters Victoria Island, Lagos Maroko Rd., Victoria Island, Lagos |
| イタリア | フェデラル・パレス・ ホテル内 | 615710 | Ahmadu Bello Rd., Victoria Island, Lagos |
| フランス | ラ・ブラッセリー | 615464 | 52 Ademola St., Victoria Island, Lagos |
| インド | ラ・ブラッセリー ラゴス・シェラトン タジマハール | 615464 681914 | 52 Ademola St., Victoria Island, Lagos 108 Awolowo Rd., Ikoyi, Lagos Airport Rd. |

(2) その他の飲食店

ディスコはホテル内のナイトクラブかペニンスラ（ジョーズ内）、バックス（Awolowo Rd.）などでやっている。

2. 衣 料

2-1 衣 料

(1) 一般事情

年間を通じて暑く、夏服でほぼ間に合う。しかしハマターンの時期（11～2月）、雨季は涼しくなるので、上にはおるものや、長袖の服があると重宝する。また、室内ではクーラーをかけるため、体が冷えやすいので、袖なしよりも袖のある服の方がよいようである。当地でも、衣料品を買うことはできるが、割高なこと、サイズも合いにくいので、特に下着などは滞在期間中に必要な量だけ日本から持参することが望ましい。

(2) 日本から持参した方がよい衣料

当国で出回っている衣料品は、主に中国、香港、インドネシア製、あるいはヨーロッパ製のセカンドハンドなどである。これらはサイズが合わないことが多いので、特に下着類、靴は持参した方がよいと思われる。男性のネクタイ、女性の外出着などはなかなか好みのものがないので用意された方がよい。洗濯、アイロンなどで衣類の消耗が激しいため、ひとつおりの衣料を持参し、足りなくなったものを現地で補充していくことをすすめる。（現地で洋服などを仕立てることも可能である）

子供用品では、耐久性のある品質のものを滞在中の成長に合わせて各サイズを多めに用意する。靴はサイズがないので、ぜひ持参されたい。帽子、長袖の上着、長ズボンなどがあると便利である。

乳幼児に関しても、必要と思われるものは成長に合わせて持参した方がよい。おむつも洗濯法、干し方を考慮すれば使用できる。紙おむつは、日本よりも少し品質は劣るが入手できる。

(3) 任国で調達した方がよい衣料

(4) その他の留意点

男性の背広は夏用のもの 1、2着で十分である。テニス、ゴルフなどのスポーツを楽しみたい方は、それ用の服を日本から持参した方がよい。

2-2 礼 装

(1) パーティ

男性はスーツ、女性はフォーマルなワンピースを着用する。

(2) 式 典

現地も含め、あらゆる式典用にダークスーツ（濃紺など）1着あれば間に合う。戸外で行なわれる式典などは、暑く、長時間にわたることもあるので、女性は綿などでゆとりのあるワンピースをフォーマル用として持参した方がよい。

(3) その他の冠婚葬祭

(4) その他の留意点

2-3 洗濯、仕立て、修繕、保管

(1) 洗 濯

洗濯はクリーニング店で水洗い、ドライとも可能である。しかし、麻、絹製品は避けた方がよい。

(2) 仕立て、修繕

仕立ては、男女、子供用もふだん着程度なら比較的安価ででき、修繕も同様に仕立屋に頼むことができる。

(3) 保管

保管は湿気が多いので防虫、防かびなど、日本と同じような注意が必要である。防虫剤は当地でも購入できるが、持参されたい。

3. 住 宅

3-1 住宅事情

(1) 一般事情

ホテルは、一流ホテルとしてエコー・ホリデー・イン、イコイ、ラゴス・シェラトン、二流としてフェデラル・パレス（国営、日本人向き）がある。

一流のマンション、アパート、一戸建てもかなりあり、それに最近では貿易不振のため外人の本国帰国引揚げが目立ち、空き家が増えている。家賃は、アパートやマンションで5万～7万ナイラ（年間）、一戸建てで5万～6万ナイラ（年間）くらいが一般である。治安上は、アパートやマンションの方が一戸建てよりもよい。というのは、アパートやマンションが襲われた例はほとんどないからである。一戸建てのガードマンは、頼りにならないことが多い。

(2) ホテル事情

表1 日本人がよく利用するホテル

| ホテル名 | 電話 | 住 所 | 料金（前納） |
|-------------|----------------------------|---|-----------------------|
| エコー・ホリデー・イン | 615000 612228 614444 | Kuramo Waters Victoria Island, Lagos | S 95～150 D 115～200 |
| イコイ | 603200～8 | Kingsway RD., Ikoyi, Lagos | S 55～130 D 80～160 |
| フェデラル・パレス | 610030 610082 | Ahmadu Bello Rd., Victoria Island, Lagos | S 70～100 D 80～120 |
| ラゴス・シェラトン | 900930～9 | Airport Rd., Ikeja (空 港近く) | S 180～250 |

(3) 住宅の探し方

邦人の帰国引揚げ後の住宅を口コミで引き継ぐ場合と、邦人間に信頼されている不動産屋に依頼する場合との2通りある。不動産屋は次の2店がある。

Knight and Frank TEL 600990～9

Fox and Co TEL 600700

(4) 住宅の選定上の留意点

治安、環境上の観点からイコイ島、ヴィクトリア島が良好で、やむを得ずイケジャ地区に住まねばならない人（日本人学校や同地区に工業を有する企業に關係する人）以外は、ほとんどのこの両島に住居を設定している。イケジャ地区

は治安上好ましくない。買物も、イコイ島、ヴィクトリア島からなら 2～3キロメートル（約10分）のところに十分間に合うものがあり、不便はない。

住宅は家具なしがほとんどである。電話はまれについている場合があるが、ほとんど居住者が新規につけることになり、回線不足のため不可能に近い。帰国引揚げ邦人から譲り受けるのが最良である。

自家用車庫はついていない場合がほとんどである。電気、給排水はアパートやマンションではほとんど整っているが、一戸建てでは給水車から買うケースがあるので、契約時に確認のこと。使用人の部屋は、一戸建てや小さなアパートでは敷地内にある場合が多いが、大型アパートやマンションではない場合が多い。

(5) 住宅の契約

住宅の契約は、通常 3～5年をめぐり、かつ最低 3年の前払いで不動産屋の仲介のもとに家主と結ぶ。借家の中途解約が生じた場合でも、前払い家賃は返却されないから、邦人間で利用者を探し、契約期間を満了するよう努めるしかない。なお、期間満了時の現状復帰が往々にしてトラブルのもとになるケースが多いので、契約時に注意のこと。契約期間終了の予告は、通常 6ヵ月前に行なわれている。

(6) 居住上必要な事項

家具保険がある。公共料金（電気、電話）は、毎月郵送される。防犯対策は、特に一戸建ての場合、ガードマンのほか照明、サイレン、番犬の準備が必要である。

(7) その他

家探しは、立地、その他を大使館や現住邦人の意見をよく聞いて決めることが良策である。

4. 医 療

4-1 赴任前の準備

(1) 予防接種

任国への入国に必要な予防接種は黄熱病のみ（2歳以上）であるが、赴任までの期間が許す限り、破傷風、狂犬病、A型肝炎も受けておくとう安心である。新生児に関しては、BCG、ポリオ、3種混合で十分である。接種月齢に達していない場合、無理に受けさせず、赴任時期を遅らせる方がよい。

(2) その他の準備

眼鏡、コンタクトレンズなどはナイジェリアでは購入不可能であるから、そのつもりで予備なども含めて用意した方がよい。歯科治療に関しては、虫歯は簡単に抜かれてしまうこともあるので、日本で完全に治療をすませて赴任すること。詰めものがはずれた場合などの応急処置は、こちらの歯医者で対応できる。

4-2 医療事情

(1) 医療機関

日本人が利用できる医療機関は、次のとおりである。

St. Francis Hospital (小児、一般内科)

Kaffi St. Obalende Ikoyi, Lagos TEL 684125

St. Teresia Hospital (産科、婦人科)

Alexander Ave. Ikoyi, Lagos TEL 603180/82

Dr. Solaria (歯科)

Flat 2 Brock D Eko Court

日本大使館に医師が駐在しており、医療相談が受けられる。

(2) 緊急時の対応と措置

当国で緊急時の対応はむずかしい。そのため、緊急時の措置としては、Air Ambulance、または定期旅客便にてヨーロッパ（ロンドン、パリ）、日本への移送がとられる。

4-3 医薬品など

(1) 携行することが望ましい医薬品

一般家庭常備薬、持病のある人は薬を持参すること。そのほか、カットバン、蚊取線香、小児用の薬、などがある。

(2) 任国で調達できる医薬品

クレゾール、ミルトン（塩素系）、Sabronなどの消毒薬は手に入る。鎮痛剤、解熱剤、抗生物質なども売られているが、一般市販薬品には偽薬が出回っており不安がある。保存、管理のしっかりした薬局で求めること。

(3) 任国で調達できる衛生用品

生理用品、ナプキン類は多種みられるが、日本製は売られていないので、慣れたものを持参した方がよい。ガーゼ、脱脂綿は品質はあまりよくないが、入手可能である。避妊具、綿棒、紙おむつ、ハミガキ粉、殺虫剤なども手に入る。

(4) 医薬品を使用する場合の留意点

当国は医薬分業であり、薬は医師の処方せんを持って薬局店で購入し、治療を受ける。しかし、実際は処方せんなしでも購入可能である。

医薬品は、まず、信頼のある薬局で購入すること。その際、製造年月日、封が開いてないか確認する。服用にあたっては、説明書を読むことはもちろん、何か副作用やトラブルが起きた場合のために、薬品名、服用量、時間、頻度などを必ず記録しておくこと。安易な素人判断は、極力避けるべきである。

4-4 妊娠、出産、育児

(1) 妊娠した場合の対応

産婦人科の病院があるので利用し、経過をみていくことは可能である。しかし、流産、早産への対応、緊急事態に対する処置などは、確実とはいえない。任国での分娩は不可能ではないが、異常分娩を含め不安があるので、すすめられない。したがって、こちらで妊娠した場合、安定期を待って帰国、出産することが望ましい。

(2) 出産後の対応

母子検診は、個人病院で受けることができる。予防接種は各病院で受けられるが、病院によっては薬持参となるので、できるだけ日本で済ませて行くことが望ましい。

(3) 育児

育児用品は種類が少なく、値段も高いので、必要と思われるものは日本から持参すること。簡単なおもちゃはこちらでも手に入る。

育児上の留意事項として、次のことがあげられる。

メイドの健康診断を行ない、手洗いなど衛生面の指導を徹底する。

洗濯物には必ずアイロンをかける。

室温の調節と皮膚の清潔、保護（虫さされ、あせもなど）に心がける。

部屋のなかで遊ぶことが多くなるので、保育所や外での遊び場を見つけ、ストレスの解消に心がけてやる。

4-5 手術

(1) 任国で可能な手術

信頼できる医療機関がないため、当国での手術は避け、ヨーロッパ、日本で受けることを頭においた方がよい。

(2) 手術設備の状況

いちおうの手術機材、設備は整っているが、手術に伴う入院や処置、その後の感染などのリスクを考えると、できるだけ避けた方がよい。

(3) その他の留意点

4-6 任国でよくかかる傷病

(1) 一般の疾病

腹痛、下痢——細菌性の下痢のほかに冷たいもの、アルコールの飲み過ぎ、不規則な生活による疲れなどから抵抗力が落ち、下痢を起こすことが多いので、生活全般に注意する必要がある。

かぜ——気温の変化の激しい雨季（6～7月）、ハマターン（泥塵を含ん

だ北東からの季節風)の時期はかぜにかかりやすい。特に季節の変わり目は注意が必要である。子供は上気道感染を起こしやすいため、十分に注意するとともに、せき止めなど持って行くことよい。冷房で体調を崩すことが多いので、室内の温度調節に心がけること。

(2) 風土病・伝染病

マラリア——当地でのマラリアは、主に熱帯熱マラリアである。クロロキン耐性のマラリアもみられるので、注意が必要である。ラゴスでは邦人の罹患は比較的少ないが、地方への出張の際罹患する例が多い。マラリア予防の第一は蚊に刺されないことであるので、地方に行く際、蚊取線香は必携である。マラリア予防薬は小児用も含めてこちらで買えるが、信頼できる薬局で購入すること。また、健康管理休暇の折、ヨーロッパで購入すると安心である。

A型肝炎——輸血など、血液を介して感染する場合と、食べ物を介して感染する場合があるが、当地では外食などで、不衛生な調理により罹患することが多い。疲労やアルコールの飲み過ぎなどが誘因になって発病するので、規則的な生活と適度な休養を心がけたい。

細菌性下痢症——細菌性赤痢、アメーバ赤痢、コレラ、腸チフス、がある。ほとんど経口感染なので、手洗い、調理に気をつけること。外食に際しては、生野菜などはなるべく食べないようにした方がよい。腸チフスはときにマラリアと似たような症状を示し、鑑別がむずかしいことがある。そのため、特に高熱が出る時などは、体温表を作り、診察時の参考に持参するとよい。

性病——エイズ、淋病、梅毒など非常に多い。

その他——邦人ではあまり例がないが、ナイジェリア中央部ではラッサ熱、中央部から南部にかけてギニアウオーム(水たまりのミジンコに寄生している原虫で、皮膚から入ってくるメジナ吸虫症)、また乾季になると北部を中心に、脳脊髄膜炎の流行もみられる。流行地域に近寄らないことはもちろん、住宅とその周囲をきれいにすること、使用人の健康に留意し、池、川、沼などにむやみに入らないなど注意したい。破傷風、狂犬病もみられるので、予防注射を受けてくることが望ましい。

(3) 有害動物、病害虫

都市で生活する限り問題はないが、郊外には毒ヘビが生息する。蚊、アリ、ゴキブリ、ダニは多いので、駆除に努めること、そのほか有害植物がみられるので、地方に出かける際は、軽装ではなく長袖、長ズボンを着用したい。

4-7 保健衛生

(1) 飲料水

水道の水といえども生では絶対に飲まないこと。濾過し、煮沸後の飲用を習慣づけること。市販のミネラルウォーターは安心である。

(2) 濾過器の入手法

当国にて買うより日本から持参した方が信頼性が高いので、交換用スペアも含めて持参のこと。

(3) その他の留意点

日頃から保健衛生に留意して、まず第一に自衛する心がけが必要である。病気予防に関して、下記を参考にされたい。

暑さや湿気、生活の変化は、思った以上に体のストレスとなる。また体力の弱った時に病気になりやすいので、日頃から規則正しい生活をし、十分に休養をとる。

家のなかをきれいにしておくことはもちろん、家の周りもきれいにし、水たまりや雑草などないようにする。

暑い日、できるだけスポーツなどで体を動かし、気分転換をはかるようにする。

病気の予防、病気になった時の対応——水道のないところでは、口すすぎの水も湯ごましにする。絶対に小川、池、沼に入らない。予防接種はきちんと受ける。年1回検診を受ける。使用人にも受けさせる。体調がおかしいと思ったら、無理をせず、十分に休養をとる。自分でかかって診断しない。信用できる医療機関にみてもらう。薬は指示されたとおりに飲む。体温、その時の状態など記録しておき、診察を受ける際持参する。

使用人に対して——使用人のトイレは別にし、手洗いを徹底させる。ぞうきん、ふきん、てふき、バケツなどは用途別にはっきり区別し、清掃用具を整える。健康状態、服装などにも気をつけ、必要であればエプロン、ユニホームを支給する。衛生の観念が違うので、根気強くきちんと教える。

食生活について——きちんと毎食食べる。肉類、野菜、果物など偏りなくとるように心がけること。冷蔵庫、冷凍庫を過信せず、古くなったものは処分し、詰込みすぎないようにする。日本からの食料品は湿気などで変質しやすいので、長期保存を考えてなるべく涼しい暗いところに保管する。

調理について——肉や魚にさわった後は、よく手を洗って次の食品を取り扱う。包丁とまな板は、肉用、魚用、野菜用に区別する。水はいったん煮沸させたものを飲む。氷も煮沸した水で作る。肉、ハム、ソーセージなどもよく火を通す。卵は洗って冷蔵庫に保存する。生卵は食べない。きゅうり、トマトはよく洗って皮をむき食べる。葉菜は1枚ずつはがしてよく洗う。

5. 教 育

5-1 教育事情

(1) 一般事情

家族を伴って赴任する場合、子供の教育がひとつの大きな問題となるが、幸いラゴスに17年の歴史を持つ日本人学校がある。そのほか、ラゴス以下国内の主要都市にインターナショナルスクールがあり、心配なく連れて行くことができる。しかし地方に赴任するとなると通信教育を考えなければならない。

(2) 日本人学校

(3) 現地校、外国人学校

(4) 幼稚園

5-2 入学手続および授業料

(1) 日本人学校

別称Green House という。日本国籍を有する子女が対象で、転学書類が必要である。1990年5月現在、生徒数15人（小13、中2）、教師数7人、英語講師1人である。

住 所 Plot 21 Harold Shodipo Crescent Ikeja, Lagos (P.O. Box 4375)

電 話 963290

入 学 金 小、中学校とも 400ナイラ

授 業 料 小、中学校とも 1ヵ月 1,000ナイラ

諸 費 バス運行費が 1ヵ月 100ナイラ

通学手段 ヴィクトリア島の日本大使館よりスクールバス通学（教諭添乗）

学 期 3学期制。全日制であり、日本に準ずる

(2) 現地校、外国人学校

American International School があり、邦人子女が1人在学中である。

住 所 P.O. Box 2803 Victoria Island, Lagos

電 話 61779、617860

年 齢 6～12歳（小学校から中学校まで）

学 期 9～6月、3学期制

(3) 幼稚園

Little Angel School

住 所 AB George St., Ikeja

電 話 633813

年 齢 2.5～5歳

月 謝 1期 3,000～4,000ナイラ

その他 8週間のあと1週間休み、また8週間

サルターージュ・ナーシング・スクール

住 所 Taslim Elias Close, Victoria Island, Lagos

電 話 6113382

年 齡 2.5～5歳
月 謝 1期 3,800～4,000ナイラ

5-3 教育関係施設

(1) 図書館

市立、国立の図書館がラゴス島にあり、一般に公開している。そのほか、イコイクラブや日本人学校にも図書室はある。

(2) スポーツ施設

イコイ島にはイコイクラブ、イケジャ地区にはイケジャカントリークラブがあり、テニス、ゴルフ、スカッシュなどが楽しめる。

5-4 家庭学習

(1) 家庭教師

現地教師、外国人教師を雇い、英語、フランス語などを習うことができる。

(2) 通信教育

現在カドゥナ在住専門家の子女 1人（小 1）が受けている。詳しい手続は、赴任前に日本で海外子女教育振興財団に問い合わせること。教科書、教材は日本大使館あてに送られるため、着任後、必ず領事に連絡されたい。地方に赴任する場合、インターナショナルスクールあるいは現地の学校に昼間通学させ、集団のなかにとけこませることをおすすめしたい。

(3) 携行した方がよい家庭用学習教材

日本語の問題集、参考書などは現地購入が不可能なため、滞在期間中の学年にあわせ持参するとよい。国語辞典、英和・和英辞典、図鑑は最低限必要である。またインターナショナルスクールへ通う場合、科学用語辞典があると便利である。

6. 家庭の用人

6-1 一般事情

ナイジェリアで生活する外国人は、だいたい使用人を雇っている。本人が留守をする屋間など留守中のトラブルを考慮した場合、料理人、庭師など誰かしら使用人を置く方がこの国では適切である。邦人も例外でなく、1家族1人は雇っている。また子供のいる家庭では、子守を置く場合も多い。雇う時は、当人に仕事の内容を納得させたうえで契約を結ぶ。契約書により雇用する場合は、後日問題が発生しても十分に対応ができるように作成しておく。個人家庭では、契約書を結ばずに口約束にて雇用する方が多い。

この国で生活するにおいて、使用人の絡んだトラブルや事件が目立つ。とりわけ日常生活で使用人と接する時間の多い婦人との間で衛生面、習慣の違いからくるトラブルが起きやすい。

ナイジェリア人の家庭でも使用人を置くが、同じ部族で血縁・親族関係にある人か、身分がはっきりしている人以外はけっして雇わない。彼らの使用人には女・子供が多い。これは上下関係の明確さを重視するのと、女・子供では悪さをしないという安心を意味したものである。邦人を含め外国人は、これといったナイジェリア人を知っているわけではないので、結局は前任者か友人の使用人を雇うことになる。

使用人を雇った場合の心得として、次のことがあげられる。

腹が立っても絶対に手をあげない。人前で叱らない。

日本の常識、習慣を無理に押しつけない。

雇い主に対し、金銭の援助は当然として求められるので覚悟しておく。

使用人の前で大金をみせない。貴重品は厳重に保管する。

仕事の指示は明確にし、仕上がりのチェックもする。

仕事にミスがあったら、納得するまで説明する。

企業が雇い入れる場合などは、雇用契約で下記の事項を決めるが、個人では口約束の方が便利である。

最低賃金 法定最低賃金は月給 250ナイラまたは日給10ナイラ（1991年1月改正）

以下、雇い主により異なる。

住宅手当 1ヵ月80ナイラ

交通費 1ヵ月 150ナイラ

労働日数・時間 週 5日40時間

有給休暇 1年間に 2週間

病気休暇 1年間に 7日間

出産休暇 産前産後 3ヵ月

忌 引 7日以内

そのほか、次のものがある。

クリスマス手当 賞与 1ヵ月分

休暇手当 ころづけ程度（ナイジェリアの習慣）

解雇および契約解除 法は原則として文章により解雇などの通告を行なうよう定めている。その際はWarning Systemに則り 3回目の警告で解雇できるとし、即時解雇を禁じている。契約解除は、とりかわした契約条項が履行されなかった場合などにおいて適用されるが、これも 1ヵ月前に文章で通告するか、通告のかわりに 1ヵ月の賃金相当分を支払うことで解除することができる。

6-2 運転手

(1) 雇用

地方出張などで車を使用する機会の多い人には、人命を預けるという意味において、使用人のなかではもっとも重要な職種であるので簡単に雇うことはせず、経歴、人柄を確かめてから雇うようにしたい。特に邦人間で評判がよい人（雇い主が帰国したなどの理由で失職している人）、あるいは信頼しうる職場の人の紹介で身元がはっきりした人を雇うこと。

(2) 日常管理

安全運転を心がけるよう指導して、特に子供や老人を乗せる際は、スピードなどに気をつけるよう指示しておくことが大切である。また、雇い主の了解なしに車を使用させない。盗難などトラブルを防止するための心得などを、日頃より指導する。そのほか雇用する時に洗車、車内清掃、走行日報記入を申し渡しておき、励行させる。

(3) 教育指導

一般にラゴスなど、大都市内では、運転マナーが非常に乱れているが、目にあまる運転をするようなら指導する。その日の行動・日程をあらかじめ伝達しておき、余裕を持って運転させる。事故の対応（連絡方法、処置）を確認しておく。

(4) その他の留意点

当国では車の盗難が多い。自宅駐車中に盗難にあった場合は、ガードマンとドライバーが投獄され、自宅外で持ち主不在時に盗難にあった場合は、ドライバーが投獄される。

6-3 メイド／サーバント

(1) 仕事の種類と人数

ひとりの者が料理、洗濯、掃除をやることが多い。ただ、乳幼児がいる家庭などでは、子守を別に雇う場合もある。ゲストハウスを持つ企業は、それぞれの仕事を分担させるため複数雇うことになる。

(2) 雇用

知人の紹介で決めることが多くなりがちだが、一定期間をおき、仕事ぶり、人柄などを見極めてから正式に雇用するとよい。

(3) 日常管理

メイド、サーバントはわれわれの衣食住に関係しており、特に彼ら自身の健康と衛生管理には気をつける必要がある。（手洗い用の石けんの支給、ユニフォームの支給、定期健康診断） また、素材別のアイロンのかけ方、材料別の

まな板、包丁の使い分け、ぞうきんとふきんの使い分けなど、納得するまで丁寧に説明することが大切である。とかく日本では常識だから説明するのも面倒くさくなりがちだが、根気よく努める。

6-4 庭師、ガードマンなどの雇用

(1) 雇用

庭師は知人などに紹介してもらい、ガードマンは信用のおける職場の現地の人に紹介してもらうか、警備会社から派遣してもらう。

7. 交通事情

7-1 交通手段

(1) 一般事情

① 道路、鉄道、航空の現状

経済規模の拡大に対し、運輸部門の建設、施設整備の遅れが目立ち、経済発展のネックとなっていたが、政府は第3次経済開発計画（1975～80）で最大予算を投入し、道路、鉄道、港湾、船舶、航空の各分野の充実をはかった。その結果、道路はラゴスより各州の主要都市へ通じ、陸上輸送に貢献している。1980年の道路延長距離は、推定で10万5,000キロメートル、うち43.2%が舗装されている。基幹道路は2万8,564キロメートルとなり、交通網はますます広がっている。

一方、鉄道はラゴス～ヌグル（北東部奥地）、ポートハーコート～カウラナモダ（北西部奥地）、および中間のカファンチャンからジョス経由で北東部奥地マイドゥグリまでの路線となり、この3つが幹線で総延長路線は3,500キロメートルである。第3次計画でも在来線の補修および日本、イギリスよりディーゼル機関車、車両の購入により、鉄道の近代化に向けての改善事業が行なわれた。

航空では、国際線はヨーロッパの主要航空会社が乗り入れており、ラゴス、カノ、アブジャの国際空港からヨーロッパ、ブラジル、アメリカ、東西アフリカ諸国を結んでいる。国内線はナイジェリア航空を中心に、国内の主要都市へ運行している。

② 自動車交通と輸送事情

ナイジェリアの全国車両保有台数は、1981年で18万1,494台である。ラゴスでは交通機関がマヒ状態になるため、一般車両のラゴス島への乗り入れ制限をしている。これは車のナンバーで、偶数は火、木曜日、奇数は月、水、金曜日とに分けられる。ふだんでも、市内は乗り合いバス、タクシー、大型トラックの整備不良車がエンストを起こし渋滞を誘い、大混乱するという状況である。とくに月、金曜日の朝夕のラッシュは徐行渋滞が絶えない。これは、マス・トランジットが不足していることと、スペアパーツの輸入制限から起こる車両整備の不徹底、道路交通教育の遅れなどさまざまな事情がからまり無秩序な車社会ができあがってしまったためのものである。

市民の交通手段は乗り合いバス、タクシーがもっとも多く利用される。乗り合いバスは運行区間、道順が決められ、その区間内に停留場がある。タクシーは相乗りで、最初の客の目的地が優先し、その道中で他の客を乗せる。また、国際・国内空港、ホテルには、その施設に加盟した専属のハイヤーがある。電話で予約でき、比較的サービスもよく、安心して頼める。料金は1日（8時間）

350ナイラ、空港から市内まで片道80ナイラである。そのほか、ラゴス州は島が多いためフェリーの運行があり、陸上の混雑を避けようとする利用者で込みあう。郊外ではオートバイによる輸送が行なわれている。車両の整備面ではラゴス、カドゥナにそれぞれフォルクスワーゲン、ブジョーの組立て工場があり、

これらの車種の部品は手に入る。現在はカドゥナでブジョーが細々と生産されているだけである。

③ 交通機関利用上の留意事項

大型バス、ミニバス（乗り合いバス）は整備不十分の車両が多く、特別なことがない限り利用は避けた方がよい。バスの絡んだ事故が非常に多い。

タクシーは相乗りなので最初の客の目的地が優先し、その途中でないと乗せてくれない。利用する場合は、運転手に行き先を告げ、かけあわねばならず、地名、道路名とある程度の道順を知っている必要がある。料金は乗車前に交渉となる。

鉄道は時刻表に沿った運行は期待できないため、日常の交通機関としての信頼度は低い。ファーストクラスの車両は予約がきく。

航空機は平均したフライトサービスは望めない。フライト変更、順路変更、運休などの通知が突然であったり、オーバーブッキングもまれではない。その日の朝一番の便に乗ることを心がけること。なお、チケットは前もって購入できるが、席の予約はできない。

(2) 自家用車を利用する場合

車両通行は日本と反対で右側、人は左側通行である。ギヤ、ウインカーの操作、あるいは交差点など赴任直後は戸惑うので注意が必要である。

交差点は左回りのロータリー型のラウンドアバウトと呼ばれる環状交差方式をとる。この基本原則はサークル内に入っている車両がまず優先し、他の車はその進行を妨げない。サークルに入る場合は左手に見えた車を優先させ入り、抜ける場合は右側から入ってくる車に気をつける。

夜間走行する場合、故障で立ち往生している車、尾灯のつかない車、落としものなどが非常に多いので十分気をつける。

ドアはロックし、安全ベルトは締める。極力、自分では運転しないこと。ガソリン、軽油料金（1991年1月）は、ガソリンが1リットル60コボ、軽油が1リットル55コボである。

(3) レンタカーなどを利用する場合

レンタカーはない。

(4) 道路地図

地図は書店で入手できる。詳しい地理、観光などはラゴスにある各州の地方事務所・広報課に問い合わせたらよい。

7-2 交通事故

(1) 対処方法

交通事故はどここの国でもそうだが厄介なものである。この国では加害者、被害者双方の住所、職場、連絡場所などをはっきり証明するものがなく、加えて仲立ちをすべき警官が頼りにならないなど、自分で対応するほかに策はない。しかし部族によっては、加害者にその場で制裁を加える習慣があり、対応は面倒である。人身事故以外であれば、示談に持ち込む方が話は早い。（保険会社からの損害・賠償の手続および実行は時間の浪費になるばかりである）その場

合、相手の身分証明書、免許証、車の登録証などわかるものすべて記録しておくことが大切である。また証人として、第三者に立ってもらうくらいの用心は必要である。

(2) 救急病院

(3) 盗難

オーナーは車の盗難予防にさまざまな工夫を凝らしている。ドアに二重の鍵を取り付け、ハンドル固定に鉄材を据え付けるなど、積極的に対応しているが、プロの手にかかれば安全装置も役に立たない。しかし、実際の盗難事件は、雇っていた運転手が手引きしたり、直接本人に乗り逃げされたケースが多い。車自体に金をかけ予防するより、運転手の生活状態に気を配る方がよいと思われる。

7-3 交通違反

(1) 交通法規

(2) 対処方法

7-4 車の修理

(1) 部品

現地組立て車の交換部品は手に入る。日本車の販売代理店がいくつかあり、部品も取り扱っている。持ち込む場合、日本のメーカーで取扱い車種を調べてから送ればよい。また過去に（1970年代）日本車が相当台数輸入された経緯があり、中古車用の部品はある。

(2) 修理工場

オートマチック車、コンピューター内蔵車など特殊な部門の修理は不可能であるが、そのほか一般の修理はできる。

8. 通 信

8-1 電 話

(1) 一般事情

第4次経済開発計画(1981~85)では、前次計画からの継続プロジェクトの完了と、増大する通信需要に応じうる体制作り重点がおかれた。すなわち合計37万550回線を増設し、回線総数を61万1,550に増加する計画であった。しかし、それは大幅に停滞し、86年では使用可能な回線は約25万、計画目標も88年に45万回線を目指すにとどまっている有様である。電話新設費用は5,000ナイラ以上(推定)を要する。設置までは申し込み後1年は待たされる。邦人間で帰国する人の回線を譲ってもらえれば、移設料800ナイラで1ヵ月ほどで施工してもらえる。ただし、現在ラゴスでは回線がパンク状態のため、新設はむずかしい。

電話料の支払いについては、電話料の請求が1ヵ月後に郵便にて明細書と支払いフォームが送られる。このフォームに請求額を添え、銀行で支払う。郵便事情が悪く請求書の通知が遅れ、支払いが遅くなる場合があるので、月初めなどNITELの地域局に直接出かけ、請求書を作成してもらい早め早めと支払う。料金未納で回線を断たれることが非常に多い。支払いの領収書は必ず保管して、トラブル防止に役立てる。

(2) 国内電話

ダイヤル直通でかけられるが、全国というわけにはいかず、大都市間だけである。その大都市間でも日中はなかなか発信音をとれないほど込み合うので、通話は直接NITEL Officeに行き、国内通話窓口で申し込んだ方が確実である。(ここでは40ナイラ前払い) また、ラゴスでは市内の主要個所に電話ボックスが設置されており、発信音をとるまで根気がいるが利用できる。使用されるコインは10コボである。

(3) 国際電話

ラゴスよりダイヤル直通でかけられる。週日のOfficial Timeは込み合い、かかりにくい。日本へは深夜か早朝だとつながりやすい。日中かけたい場合は、直接NITELの国際通話窓口に行き申し込んだ方が早い。料金は1分間、25ナイラで、3分以上の前払いが必要である。ヨーロッパへは22ナイラである。

日本あて通話は、例えばJICA本部へかける場合、00981-3-3346-5311となる。

8-2 電 信

(1) テレックス

1986年で回線数1万2,750であるが、端末機の関係で全部は稼働していない。NITELのテレックス部にて日曜、祭日以外発信できる。料金は1分以内60ナイラである。なお、受信の契約が可能で、年間契約250ナイラで私書箱が開設できる。単発受信は1本につき60ナイラである。

(2) ファクシミリ

設置は可能である。NITELにて1本60ナイラで電送可能である。

(3) 電 報

各国共通 1語 5ナイラである。

8-3 郵 便

(1) 一般事情

郵便物は宅配されず（ラゴスでは宅配業務を行なっている）、私書箱のある郵便局にとりに行く。ラゴスには、中央郵便局以外に14支所があり、業務を分散している。国内の郵便事情はあまりよくない。書留は、私書箱に案内メモで通知される。引き取りには身分証明書が必要である。小包も同様である。最近 Letter Speed Post と Parcel Post が新設され、サービスの向上に努めている。料金は次のとおりである。

普通便

| | | |
|------|-----|------|
| 日本まで | 手紙 | 60コボ |
| | はがき | 30コボ |

Letter Speed Post (500グラム以内)

| | |
|-------|-------|
| アメリカ | 70ナイラ |
| ヨーロッパ | 65ナイラ |
| 日 本 | 70ナイラ |
| ラゴス市内 | 10ナイラ |
| ラゴス市外 | 20ナイラ |

Parcel Post (500グラム以内)

| | |
|-------|--------|
| アメリカ | 120ナイラ |
| ヨーロッパ | 110ナイラ |
| 日 本 | 120ナイラ |
| ラゴス市内 | 10ナイラ |
| ラゴス市外 | 20ナイラ |

(2) 課 税

9. マスコミ

9-1 新聞

(1) 主な日刊紙(英文)

「Daily Times」 「The Punch」
「The Guardian」 「New Nigerian」
「National Concord」

経済新聞は、次のとおりである。

「Business Times」
「Business Concord」

ラゴスには配達業者があり、契約(月払い)で配達してくれる。

(2) 本邦日刊紙

本邦各日刊紙はOCSの代理店が取り扱っており、配達もする。購読料は、『朝日新聞』、『日本経済新聞』が1ヵ月2万1,500円(現地取扱い伊藤忠商事)である。

(3) 欧米紙

ホテル、空港でイギリス系新聞が2~3日遅れで買える。

9-2 ラジオ

(1) ラジオ放送局

ラジオ・ナイジェリアが全国放送しているほか、各州が放送局を持っている。この放送は地方語になる。

(2) ラジオジャパン

日本語放送はラジオジャパン短波で聴ける。夜間(現地時間)11時の放送がよく入り、アンテナを張ると受信しやすい。

(3) 任国で聴取可能なその他の外国放送

Voice of America、BBC London、Voice of Africa を聴取できる。

9-3 テレビ

(1) テレビ放送局

ナイジェリア・テレビ・オーソリティ(NTA)がラゴスより全国放送をしているほか、7つの州にテレビ局があり、地方語でも放送している。放送時間は夕方5時から夜12時までで、カラー放送である。

(2) テレビ受信

テレビの受信方法はPALで、日本のテレビをそのまま持参しても現地の放送はみられない。

10. 教養、娯楽、趣味、スポーツ

10-1 映画、演劇

(1) 映画館

国内各都市には、それぞれ映画館はあるが上映されるフィルム（主にローカル、インド映画）が古かったり、施設も満足に稼働しておらず、映画の人気は薄い。実際に閉館しているところが多い。郊外にはオープン・シアターの建物が残っていて、今では古きよき時代を懐古するだけである。

(2) 劇場

ラゴスにある国立劇場の設備は、アフリカ随一を誇る。第2回「1977年芸術と文化の世界黒人とアフリカの祭典（FESTAC）」が開催された。現在は演劇、映画、舞踊、文化展示などさまざまな行事が行なわれている。

10-2 出版・書籍

(1) 一般事情

ナイジェリアは予想外に言論は自由で政治、経済、一般生活、趣味に関する出版物は多いが、情報源が偏っていたり、収集活動も不足で信頼性に欠ける。特に政府発行の出版物は出所、年代が不明確で根拠のない統計数字が記載されている場合がみられ、参考程度と考える方が無難である。それに統計資料は1985年以降途絶えていることが多い。

週刊・月刊紙としては、スポーツ、経済、一般雑誌、新聞ダイジェスト、外国雑誌がある。

ナイジェリアはノーベル文学賞受賞者Wole Soyinka氏（1986年受賞）をはじめMr. Clark、Mr. Achebe など著名な作家を生み出しており、彼らの作品は多い。

(2) 書店

Book Shop はラゴス島にある最大規模の書店で、外国書の発注も可能である。文房具も内外のものを数多く揃えており、かつ発注も可能である。一方、邦人はOCSを利用して週刊、月刊誌を日本よりとり寄せ購読している。

10-3 語学学習

(1) 語学学習施設

(2) 家庭教師

個人授業による英語、フランス語などを習うことができる。

10-4 文化活動、文化施設

(1) 一般事情

邦人の任期が短いことと生活に余裕がないため、自主的に行なうというような自立した文化活動は行なわれていない。

(2) 日本・任国友好協会などの有無と活動の内容

JICA研修員で組織されたJICA同窓会「JICA Alumni Association of Nigeria」があり、不定期ではあるが年1回の会合が行なわれている。

代表者 Mr. D. A. Akinwale

c/o Fed College of Education(Tech), Akoka, Yaba, Lagos(P.O. Box

269) TEL 822768

(3) その他の文化活動、文化施設

各国大使館が主催する映写会、音楽会はときどき行なわれている。

10-5 写真、ビデオ

(1) 写真

現像はコダック、フジカラーなどのサービス代理店がある。なかでも韓国人が始めたTiger Industries Nig. Ltd Laboratory (住所 82 Awolowo Rd., Ikoi, Lagos) では、日本の設備を取り入れており信頼できる。ここでは、フィルム付きインスタントカメラの現像も可能である。ナイジェリアでは現像技術が店によりかなりの差があるので、評判のよいところを選ぶこと。また、パスポート用、証明写真などは日本から持参することをすすめるが、各国大使館前に露店の写真屋があり、簡単にとれて便利である。

(2) ビデオセット

カセットはベータ、VHSともに現地購入できる。電気専門店にもスリーシステム、マルチ式デッキなどが揃っている。最近、ビデオの普及が盛んでテープのレンタル業も増えている。ビデオはVHSが主流である。

(3) ミュージックテープ

録音されたジュジュ・ミュージック、ソウル・ミュージックは17ナイラで市販されている。生テープは7~25ナイラで購入できる。

10-6 音楽鑑賞、演奏、民族楽器

(1) 音楽会、コンサート

国立劇場では世界的アーティストの演奏が聴ける。そのほかイースター、クリスマスシーズンにはホテルのイベントとして、毎年ヨーロッパからアーティストを招待しており楽しめる。

(2) コーラス、演奏グループ

ナイジェリアはレイゲ、ジュジュ・ミュージックの故郷といわれるが、素朴なドラムの音色に宗教的要素を取り入れたアフリカ独自の音楽が楽しめる。全国にその地方の演奏家がおおり、ホテルのショー、そのほか、冠婚葬祭の場で活躍している。ラゴスにはライブハウスが何ヶ所もあり、アフリカの心を満喫できる。

(3) ピアノなど

購入、レンタルも可能で、調律師もいるが、邦人でピアノを持ち込んだ例はない。

(4) レコード

取扱店はあるが、カセットテープが主となっているため、はやらない。

(5) 民族楽器

打楽器、木管楽器、弦楽器が多数あり、特にドラムはトーキング・ドラムと呼ばれ、アフリカ音楽の基調となっている。また、タンバリンに似たマスカルもポピュラーな民族楽器である。

(6) その他の楽器

10-7 手芸、絵画、美術工芸

(1) 手芸

手芸材料は入手がむずかしいため、あらかじめ必要なものは持参すること。一部の邦人はヨーロッパへ休暇旅行した折に、好みのものを仕入れて楽しんでいる。

(2) 絵画、美術工芸

当国には独特の画風を持った絵画があり、国立博物館、画廊などで鑑賞できる。地方には博物館、工芸制作所があり、地方色豊かな作品がみられる。オヨ州、オシヨボを本拠地とする画家（音楽家）、Twins 77はその代表である。絵の具、筆は良質なものが無いので持参した方が無難である。

10-8 趣味

(1) 園芸

花き、鑑賞植物は品種改良されたものでなく自然のままのものが多いが、味わい深い。園芸雑誌（熱帯植物用）など持参すると、楽しみも倍加する。肥料、農薬、園芸材料の専門店はないが、工夫次第で捕える。家庭菜園用として日本野菜の種（三つ葉、しそ、春菊、ゴボウなど）を持って行くとよい。

(2) 釣り

海釣り（トローリングを含む）がかなり勇壮に楽しめるが安全に留意されたい。獲物はヒラアジ、クロッカー（スズキの種類）、イサキ、カマス、カツオなどが望める。釣り道具は針、糸類は調達できるが、それぞれ目的の獲物に応じた選択はできない。

10-9 娯楽、遊戯など

(1) 娯楽、遊戯、ゲーム

国内全体では、屋外の娯楽施設が不足している。ラゴス郊外には遊園地が何ヵ所かあるが、交通機関の不整備、治安の問題で足を運ぶことは容易でない。地方に動物園のある都市もあるが管理不足は否めない。邦人はマージャン、ブリッジ、カジノ（ホテル）など、屋内遊戯に興じている。

(2) 芸能興行

諸外国からの興行は、ときどき行なわれている。日本からも1989年1月に文化交流として、和太鼓の林英哲氏、ジャズ・ピアニストの山下洋輔氏がコンサートを開いた。

10-10 スポーツ

(1) ゴルフ

国内の大都市にはゴルフ場があり、楽しめる。新首都アブジャには、パブリックコースでは国内唯一のグリーン（他のコースは砂にオイルをまぶしたブラウンになる）をもつコースが造成中である。現在、もっとも整ったコースはラゴスにあるイコイクラブで、毎年ナイジェリア・オープンが開催される。このクラブには用具がすべて揃っており、現地調達も可能である。なお、プレー代金はビジターは平日40ナイラ、休日70ナイラで、入会金は8,000ナイラ（推定）となっている。

(2) テニス

ナイジェリア各地には、個人会員制のテニスクラブがある。ラゴスではそのほかに企業所有のコートなどがあり、邦人は利用している。そのほか日本大使館では、土、日曜日にコートが開放され日本人会のテニス大会会場になっている。ボール、ラケット、靴は現地で揃えられる。また、ガット張替えもイコイクラブでやってもらえる。

(3) 水 泳

大都市のホテルには、だいたいプールがあり泳げる。しかし消毒、清掃などきちんとした管理がなされているか確認してから利用されたい。ラゴスではタクアベイ、ラッキービーチ、エレコビーチなど美しい砂浜があり、海水浴が楽しめる。外海はギニア湾の荒波が打ち寄せるため、泳ぐ時に注意が必要である。

(4) その他のスポーツ、用具、ウェア

ラゴスにあるエコー・ホリデー・イン・ホテルには敷地内にジムナスチックがあり、誰でも利用できる。

(5) スポーツクラブなど

Ikoyi Club

電 話 681842

入会金 8000ナイラ (メンバー 2人の紹介で申し込む)

年会費 500ナイラ

10-11 風俗営業

国内にあるホテルにはバー、ディスコチックがだいたい備わっている。

10-12 子供の遊び

家族同伴で赴任している邦人の大きな悩みのひとつに、自由に子供を遊ばせる場所がないことがある。遊園地はあるにはあるが治安、衛生など不安がつきまとい精神的に制約され出にくく、仕方なく子供を屋内で遊ばせているのが実情である。子供用の玩具、自転車は揃えられるが、主なものは持参した方がよい。

11. その他のサービス

11-1 美容院

美容院は各地にある。ラゴスではホテルの美容院を利用して、よい店は口コミで伝えられているようである。

パーマ代金は 450ナイラ（1990年）である。

11-2 理髪店

美容院と同じ状況である。

11-3 日本より持参した方がよい美容・理髪用品

日焼け止め、パーマ液、散髪用ハサミが、特に持参すると役立つ。化粧品、化粧水などは自分にあった、ふだん利用しているものを持参したらよい。

12. 観 光

12-1 地方旅行上の留意点

ナイジェリアではラゴスの治安が最悪で、地方に行くほどよくなる。しかし、ベンデル州、オンド州などラゴス州に隣接する州は危険区域である。夜、昼を問わず、ラゴス～イバダン、ラゴス～ベニンシティー間での強盗事件は後を断たず起こっている。車での旅行の際は、複数で出かけ、夜間の運転は特に避けるべきである。また身分を明記した証明書、パスポートの写しは必携されたい。

ナイジェリアの東部ゴンゴラ州には高原地帯が広がり、2,000メートル級の山もある。登山をする場合は州政府からの登山許可を得、それに管轄都市ヨラでも登録し許可を受ける必要がある。これらすべてラゴスにあるゴンゴラ州の Reason Office で申請できる。そのほか、国境付近に旅行する場合にも、該当する州に許可を得たうえで実行した方がよい。

12-2 主要観光地・保養地ガイド

各州の観光案内には、それぞれ何ヵ所か記載されているが、実際に邦人が行った場所は少なく、情報の確かなものはわずかである。一般的に空路で行ける観光地が安全で、情報も多い。プラトウ州ジョス、パウチ州パウチを起点としてヤンカリ自然保護地域への旅行が好評である。

12-3 旅 行

(1) 自動車

全国の道路網はラゴスより各都市へ結ばれ、幹線は舗装されている。ガソリンスタンドは各沿線沿いにあり、給油に不安はない。携帯必需品としてはロープ、ポリタンク、水筒、食糧、救急箱、それにトイレットペーパーがあげられる。

(2) バス

長距離バスのサービスは、ラゴスを起点に各都市に広がっている。近距離ではミニバスがあり、現地の人材は両方を乗り継ぎ旅行する。邦人にはバスでの旅行はすすめられない。

料金はラゴス～エヌグが70ナイラ、ラゴス～ベニンシティーが40ナイラである。

(3) 鉄 道

料金は乗り物のなかでもっとも安いだが、他の交通機関より時間がかかる。ラゴス～イロリン間には急行列車が運行されている。

(4) 航空機

ナイジェリア航空は、地方の主要都市に運行している。民間航空会社は、オカダ航空、カボ航空、コンコルド航空、スカイパワー航空、ピーマス航空、ガス航空があり、全土への運行を行なっている。民間航空会社のなかで特にオカダ航空は、南部を中心に路線を開いて飛行範囲は広い。

航空券は市内の航空会社支店、空港のカウンターで購入できるが、予約はきかない。Boarding Card は当日、空港で発行される。

オカダ航空はイースター、クリスマス期間にラゴス～アブジャ間に特別パッ

- ケージフライトを組む。(アブジャ・ヒルトン・ホテルと提携)
- 12-4 エージェント
旅行代理店は多数あるが、国内の観光を目的とした客が少ないため、主に国外のサービスを取り扱っている。
- 12-5 ホテルなど宿泊施設の手配
通信施設が悪いため電話、テレックス、手紙による予約はむずかしい。一般に地方のホテルはあいている。ラゴスでの宿泊は予約した方が安心である。予約は 1週間前から可能である。

13. 治安、緊急時の心得

13-1 暴動、クーデターなど

近年における都市人口の増加、失業者の増加、また物価上昇が人々の生活を脅かし、何かのきっかけで人々の不満が爆発する可能性は常に高い。過去、数回のクーデター、暴動を繰り返している。暴動はある程度予測できるが、クーデターは突然発生している。最近では1990年4月に起きた未遂事件がある。

(1) 緊急時の連絡

暴動、内乱などの緊急事態が発生した場合の連絡網は、日本大使館および日本人会が整備している。地方に在住している場合、空港、放送局、電話局など占拠されていることを念頭におき、あわてず状況の落ち着くのを待ってから日本人会の情報網を使い、ラゴスの大使館に連絡する。

13-2 強盗、盗難

(1) 一般的治安状況

最近、警察のナイトパトロールが強化され落ち着いた感もあるが、犯罪は毎日のように新聞をにぎわせており、状況は好転せず油断はできない。邦人の主な被害は、押し込み強盗や車の盗難である。

(2) 防犯対策

以下のような対策を積極的にたてる。

- 警備員を雇う、番犬をおく
- 塀・柵など外回りを固める
- 外灯など照明装置を取り付ける
- 音響警報装置を取り付ける
- 鉄扉を玄関、寝室に取り付ける
- 玄関に二重の鉄扉をつける
- 窓には鉄棒をつける

一般に、一戸建てより大型アパート、マンションを選ぶ方が安全である。使用人、門番などとの対人関係の悪化により、手引きされるケースが一番多いので、トラブルは避ける。

(3) 被害時の心得

できるだけ相手とは直接的な接触を避け、反撃は絶対にしない。相手の要求に従い金品、物品の被害にとどめる。被害届はただちに警察に出し、大使館にも連絡する。

13-3 火災、風水害、地震

(1) 一般的災害発生状況

自然災害を直接邦人が受けたことは聞かない。しかし、雨季に入る5～7月に突風が吹くことがあり、特に北部では注意が必要である。火災については、電気製品にかかわるプラグ、ソケット、配線のショートが多い。またプロパンガスを燃料にしているため、その扱いには十分注意が必要である。

(2) 防災対策

火災に備えて消火器を設置しておくこと。また旅券や重要書類は1ヵ所にま

とめて保管し、緊急時の搬出に備えることも大事である。

(3) 被災時の心得

ただちに警察に報告し、大使館にも連絡する。日本大使館発行「治安防犯の手引き」を参照されたい。

14. 出入国手続および帰国手続

14-1 入国時

(1) 空港施設概要

図 1を参照されたい。到着便は、2つのロビー（D、Eフィンガー）のうちのいずれかに誘導される。機を降りたらロビーを抜け、階段を下り移民局カウンターの外国人窓口に並び、入国カード、パスポートを提示し、入国審査をすませる。その後、荷物を引き取り税関カウンターにて検査を受ける。以上が入国にかかわる順序である。なお、申告外貨は 5,000ドル以上に変更された。

(2) 入国手続書類

入国カードは機内で配布されるので、あらかじめ記入しておくこと。検疫、税関には書式はなく、口頭で返せばよい。検疫検査は黄熱病の予防注射だけ調べる。

(3) 入国審査

記入済みの入国カードとパスポートを、外国人用カウンターに出す。ここでは、滞在日数の確認と帰りの航空券の提示を求められる。（一般に短期専門家は住復の航空券を持参する）日本で 3ヵ月のビザをもらってきても、この入国審査官の記入した日数が優先されるので、滞在日数ははっきり答える。なお、居住許可証（Residence Permit）を持っていない者は、当国においてナイラ支払いの航空券は購入できない。長期専門家は入国後、居住許可証を取得しておく必要がある。

入国審査フロアの 1段下りたところが荷物引き取り場である。同時間に何便かが到着した場合、引き取りに相当時間がかかる。荷物がみつからない時は、必ずその場に航空会社のスタッフがいたので、航空券についている荷物の半券をみせクレームをつける。今までに紛失にかかわるトラブルはあったが、幸いにもすべて解決している。

(4) 税関検査

旅行者がナイジェリアに入国する時、第一番にこの国の印象を悪くするのがこの税関審査である。しかし、検査官の荷物検査は任務であるから、反抗的な態度をとらず、いわれたとおりに従うことが大切である。邦人の場合、政府が輸入禁止している品目の食料に日本食が引かかるため、その持ち込みに難儀させられる。当然、食料を持たない限り検査は何も問題はない。検査官は日本人が食料を持ち込むのを知っていて、特に難癖をつけてくる。食料をみつげられた場合、本来没収されるのだろうが、検査官はワイロを要求する。なお、荷物のうちジェラルミン、ダンボール箱が検査されやすいので、日本食はスーツケース、トランクに詰める。また、意図的に手押し車（Cart）に荷物を積む時に、食料の入ったスーツケース、トランクを一番下にして積みあげ、衣類、日用雑貨類の入った荷物を上にのせる。

(5) 空港内での留意点

(6) 空港からのトランスポートーション

専門家の着・帰任時は外務省より大使館に便宜供与の依頼がなされ、館員が

出迎えてくれるため、心配はいらない。健康管理旅行、任国外旅行、その他個人的な用件で出入国する際、ラゴス市内にあるホテルの専属ハイヤーにあらかじめ到着日、時間を打ち合わせ、出迎えを頼んでおく。何かの事情で出迎えがなかった場合、昼間であれば、空港のハイヤー、タクシーを利用すればよい。しかし、夜の場合、警察官、空港職員にハイヤー、タクシーに同乗してもらうくらいの用心は必要である。未明に到着した時は、空港にとどまる方が安全である。なお、現在専門家はエコー・ホリデー・イン・ホテルの専属ハイヤーを使うことが多い。

(7) その他の留意点

1989年より、今まで義務づけられていた外貨申請、空港内での外貨換金はなくなった。(5,000ドル以上の現金を持ち込む場合は申請)

現金は持ち込めるようになった。外貨申告は現金5,000ドル以下は必要でなくなり、(トラベラーズチェックについても同様)、入国手続は簡単になった。

1989年初めに為替管理制度が変更になり、それに付随して政府公認の両替商が登場し、ドル＝ナイラの現金交換が可能になった。この両替商では、現金の方がトラベラーズチェックよりナイラを安く交換してくれる。しかし、盗難の面を考えた場合、トラベラーズチェック、カードの方が現金より安全と思われる。ナイラの再交換についても、両替商で扱っている。(空港の1階には6軒以上両替商がある)

14-2 出国時

(1) 出国時の概要

図1を参照されたい。

ラゴス空港(Murutala Muhammed International Airport)の出発口は、空港の2階にある。航空会社のカウンターで搭乗手続をすませ、荷物検査を受ける。カウンターで出国カードを渡されるので、必要項目を書き込み用意する。中央部が出発口となっていて、その手前に空港利用税(利用税は50ナイラ)を払うボックスがある。出発口を入るとすぐが出国審査カウンターで、出国カード、パスポートを提示する。それを過ぎると、待合室となる。奥に出発ロビー(D、Eフィンガー)が2つ左右対象に分かれている。出発ロビーに向かうと、税関検査、荷物検査が続いている。出国の際の留意点として、現地通貨の持ち出しは40ナイラまででそれ以上は認められない。外貨現金はできるだけ目に触れないよう、封筒に入れ封印をして、トラブルのもとを作らないように気を配ること。ナイラ＝ドル換金は、空港の両替商で行なえる。

(2) 出国手続上の留意点

3ヵ月以上滞在する専門家は、3ヵ月以内にビザの延長手続をしなければならず、受入機関に早急に依頼する。通常は受入機関の職員という身分で2年の滞在許可が許される。(Government Officerのビザは取得がむずかしい) ビザの延長手続の際には、再入国ビザ取得も同時にするとよい。この再入国ビザを取得しないで出ると、再入国時に必ず問題が起こる。第三国でこのことに気づいたら、その国にあるナイジェリア大使館で手続をして取得する必要がある。

ナイラで航空券を購入した場合、住々にしてトラブルが起こりやすいので、チェックインは早めにし、また国外では帰りの確認、再確認を繰り返し行なう。

14-3 帰国手続

(1) 帰国時に必要な事務手続

帰路変更の場合は J I C A の承認文書を添え、日本大使館で渡航先国の追加手続をする。また必要ならば、渡航先国のビザをそれぞれの大使館にて取得する。

(2) 車の処分

新車の輸入が禁止（やや緩和されてきた）されているので、中古車は売り手市場である。

(3) 家財道具の処分

当国ではガレージセール、オークションセールなどの処分方法があり、買い手も多い。

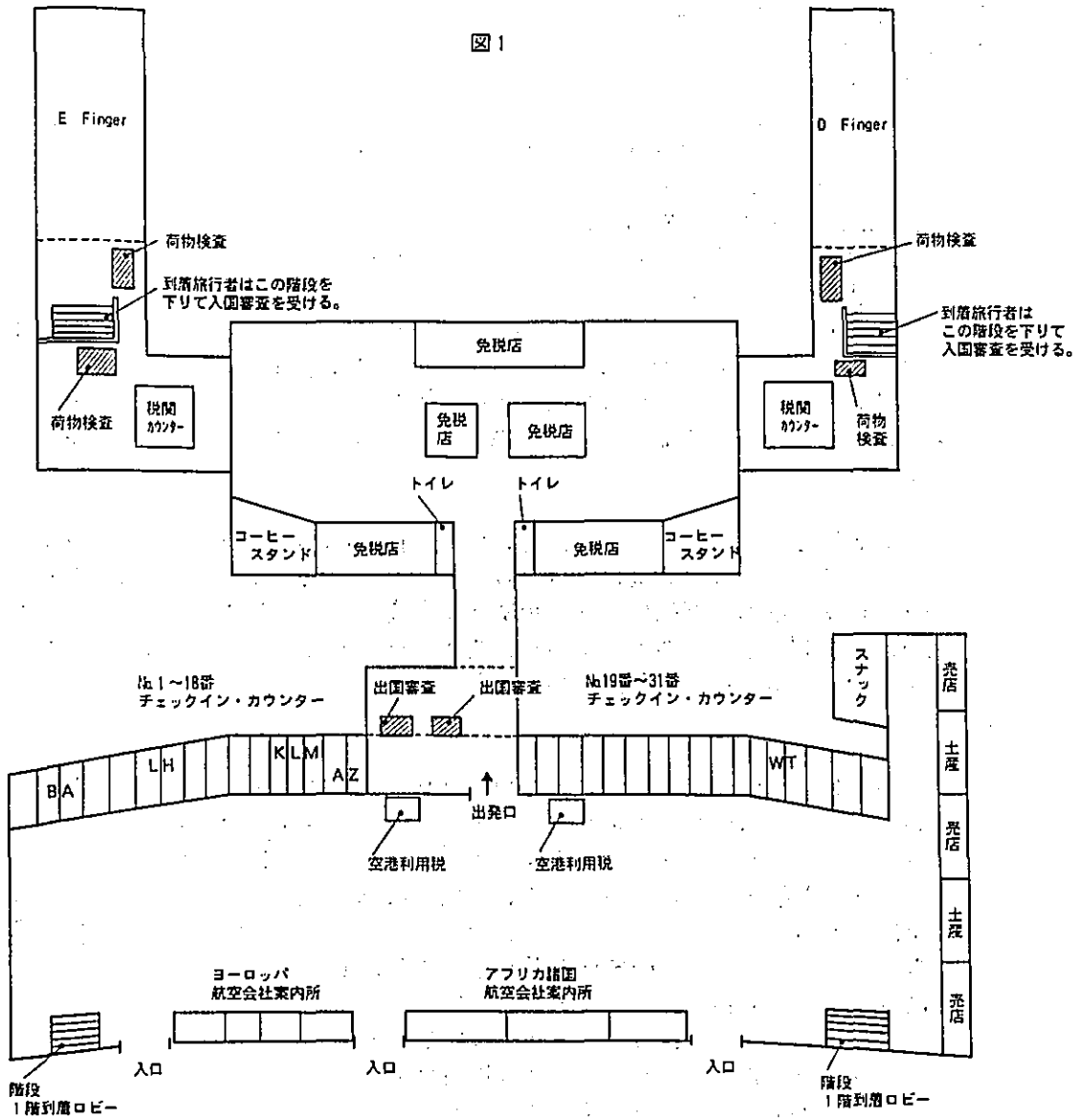
(4) 住宅の明け渡し

家主への通告は 6 ヶ月前が通例である。予定期間より早く引き揚げる場合でも、契約した金額からの差額は戻してもらえない。

(5) 銀行口座の閉鎖

金額引き出し閉鎖通告の手紙を出せば完了となる。外貨口座からの外貨持ち出しは、問題ない。

図 1



チェックイン・カウンターは、主にNo.1～18がヨーロッパ便、No.19～31番が
ナイジェリア航空、その他アフリカ便。

15. 私財の輸送、引き取り、購入

15-1 家財道具

(1) 輸送業者

Alrain(NIG)Ltd

住所 26 Creek Rd. Apapa, Lagos (P.O. Box 2206)

電話 803470~4

Panalpina World(NIG)Ltd

住所 4 Creek Rd. Apapa, Lagos (P.O. Box 12651)

電話 803440~4

現在、日本人スタッフは不在（1990年に引揚げ）である。しかし、両社ともナイジェリアで信頼のおけるエージェントで、通関手続および陸上輸送は安心して依頼できる。また、両社は日本の会社と業務提携しているため、本邦において購送手配を行なえる。日本の提携会社は、スカックジャパンと大日通運である。

(2) 輸入手続

必要書類はB/L、Invoice、Packing List、Exemption Certificate である。

本人のナイジェリア到着後 3ヵ月以内に限り、家財は免税とされる。免税手続は着任後、配属先機関に依頼し税関にて取得の手配をしてもらう。なお、証明書は貨物到着以前に取得しておく。当国ではこれらの手続にかなりの日数を要するので、敏速なる行動が求められる。

15-2 自動車

(1) 一般状況

新車の輸入は商業ベースでは輸入規制（1990年にやや緩められた）がなされているが、個人の場合は許可されている。しかし、港からの引き取りには労力と手間がかかり簡単ではない。車は当国でノックダウン製造しているフランスのプジョーを購入することができるし、輸入規制から逃れた車は代理店にて購入可能である。主に日本、フランス、韓国、ドイツ車が多い。日本から持ち込む場合は、スペアパーツの確保を考慮する必要がある。

価格（1990年末調べ）は、次のとおりである。

プジョー 504 12万ナイラ（現地組立て）

プジョー 505 20万ナイラ（現地組立て）

コロナ1600 25万ナイラ（輸入）

(2) 輸入手続

新車輸入に必要な書類は、B/L、Invoice、Packing List、Exemption Certificate である。

中古車輸入の場合は、廃車証明書を上記書類に添える。平均的手続所要時間は、すべての書類が揃っていれば 2、3日である。費用総額は、通関手続、保管料、陸上輸送料を含み 8,000ナイラである。

頻繁に起こるトラブルとしては、通関に手間がかかり、港におかれる時間が長引けば長引くほど、パーツ、スペアパーツ、ラジオ、カセットなど、盗難に

あいやすいことである。通関代理店によっては悪質なところもあるので、信頼されている業者を選ぶこと。

(3) 任国での購入

(4) 自動車登録

まず、License Officeに行き車両を登録する。必要書類は、Letter of Authority to Licensing Office、Customs Paper、Invoice、Bill of Entryである。

次に、Central Motor Registryに行き、ナンバーをもらう。必要書類は、Introduction Letter、Bill of Entry、Customs Paper、Approval Letter(Receipt)、Application Letter for Registrationである。

なお、Bill of EntryとCustoms Paperは輸入手続をしたエージェントに頼めば、すぐに用意してくれる。自動車登録にかかる日数は、約2日である。

(5) 免許証取得

自動車免許の取得は、日本で国際免許を持参しLicense Officeでナイジェリア国内免許の取得手続をする。(写真2枚持参)

(6) 保険、税金

ナイジェリアでは、すべての車両は保険に加入することが義務づけられている。保険の種類は以下の4つがあり、このなかのどれかひとつに入ればよい。

Act (不可抗力保険) 年間20ナイラ

Third Party (第三者対物保険) 年間30ナイラ

Third Party/Fire & Theft (第三者対物、火災、盗難保険) 料金は車両見積額により異なる

Comprehensive (総合保険) 料金は同上

普通はこのうちThird Partyに加入するが多い。しかし、万一に備えて総合(包括)保険に加入することをすすめる。保険会社は全国の地方都市にある。

16. 社 交

16-1 風俗習慣

16-2 パーティでの留意点

16-3 来客時の留意点

16-4 訪問時の留意点

16-5 禁止されている言動

17. 任国官公庁

連邦政府には、下記の省庁がある。

| | |
|--|---------|
| Ministry of Finance | イコイ島 |
| Ministry of Information | イコイ島 |
| Ministry of External Affairs | アブジャ |
| Ministry of Agriculture | アブジャ |
| Ministry of Education | ヴィクトリア島 |
| Ministry of Science and Technology | ヴィクトリア島 |
| Ministry of Energy, Regional Development, Mines, Power and Steel | イコイ島 |
| Ministry of Commerce and Industry | イコイ島 |
| Ministry of Works and Housing | アブジャ |
| Ministry of National Planning | イコイ島 |
| Office of the President | イコイ島 |
| Ministry of Health | イコイ島 |
| Ministry of Transport and Aviation | ラゴス島 |
| Ministry of Social Development, Youth, Sports and Culture | ヴィクトリア島 |
| Ministry of Employment Labour and Productivity | イコイ島 |
| Ministry of Petroleum Resources | イコイ島 |
| Ministry of Communications | ラゴス島 |
| Ministry of Justice | ラゴス島 |
| Ministry of Defence | ラゴス島 |
| Ministry of Internal Affairs | アブジャ |
| Ministry for Federal Capital Territory | アブジャ |

18. 在外日本関係機関など

在ナイジェリア日本大使館

住所 Plot 24/25 Apese St. Victoria Island. Lagos (P.M.B 2111)

電話 613797、614929、615984、615988

ジェトロ・ラゴス事務所

住所 4A Kofo Abayomi St. Victoria Island. Lagos (P.M.B 3189)

電話 613751

19. 地方都市

イバダン——ラゴス市の北方 141キロメートルにあるオヨ州の州都で、アフリカ第一の黒人都市といわれている。イバダン大学は同国最初の大学といわれ、独立前からの大学で有名である。

国際機関の国際熱帯農業研究所 International Institute of Tropical Agriculture : IITAには、長期専門家が 1人活動している。

任国情報をご利用の皆様へ

この任国情報は、国際協力のために赴任される JICA 長期派遣専門家、JICA 職員等の方々に、任国での生活上必要な最新の情報を提供する目的で作成されました。

本書の原データは国際協力総合研修所内のデータベースに蓄積されており、新しいデータが入手され次第、逐次更新できるシステムにしております。

現在までに、下記の国々について任国情報が整備されております。

なお、政府技術協力のために赴任する JICA 役職員および派遣専門家は、技術協力協定や要請文書などの外交関係により、任国への入国および滞在にあたって特別の条件が付され、一定の義務が免除されるなどの特権が付与されています。本情報はこれらの条件に基づいた赴任マニュアルです。したがってご利用は JICA の用務による業務渡航者に限らせていただいております。

また、本情報は外国人専門家という特殊なステイタスによる生活ガイドであって、それぞれの国の人々の一般的な暮らしぶりを紹介するものではありません。各国の一般的な各種事情については、JICA 図書館に多数資料をそろえておりますので合わせてご利用ください。

アジア地域

1. バングラディシュ
2. ブータン
3. ブルネイ
4. 中華人民共和国
5. インド
6. インドネシア
(ジャカルタ、バンドン、ジョジャカルタ、バタビ)
7. 大韓民国
8. ラオス
9. マレーシア
10. ミャンマー
11. ネパール
12. パキスタン
13. フィリピン
14. シンガポール
15. スリ・ランカ
16. タイ (バンコク、チェンマイ、コンケン)

中近東地域

1. アルジェリア
2. バハレーン
3. エジプト
4. ジョルダン
5. クウェイト
6. モロッコ
7. オマーン
8. カタール
9. サウディ・アラビア
10. 南イエメン
11. スーダン
12. シリア
13. トルコ (アンカラ、イスタンブール)
14. アラブ首長国連邦 (ドバイ)
15. イエメン

太平洋地域

1. フィジー
2. マーシャル
3. ミクロネシア
4. パラオ
5. パプア・ニューギニア
6. ソロモン
7. ヴァヌアツ
8. 西サモア

アフリカ地域

1. ブルンディ
2. エチオピア
3. ガンビア
4. ガーナ
5. コートジボアール
6. ケニア
7. リベリア
8. マダガスカル (アンタナリボ、ディゴ・スレス)
9. マラウイ
10. モーリシャス
11. モザンビーク
12. ニジェール
13. ナイジェリア
14. ルワンダ
15. セネガル
16. セイシェル
17. ソマリア
18. タンザニア (ダルエスサラーム、ザンザール)
19. トーゴ
20. ザイール
21. ザンビア
22. ジンバブエ

中南米地域

1. アルゼンティン
2. ボリビア (ラ・パス、サンタクルス)
3. ブラジル
(ブラジリア、サンパウロ、リオデジャネイロ、レシフェ、ポルトアレグレ、ベレン)
4. チリ
5. コロンビア
6. コスタ・リカ
7. ドミニカ共和国
8. エクアドル
9. グアテマラ
10. ホンデュラス
11. メキシコ
12. パナマ
13. パラグアイ (アスンシオン、エンカルナシオン)
14. ペルー
15. トリニダッド・トバゴ
16. ウルグアイ
17. ヴェネズエラ

任国情報コメント用紙

本書をより使い易いものとするために、皆様からの貴重なご意見（説明不足、間違い、誤字、脱字、ご要望など）をお待ちいたしております。ご記入に際しましては、任国情報に関することのみ具体的にご指摘くださるようお願いいたします。

〔送付先〕 〒162 東京都新宿区市谷本村町10-5
 国際協力センタービル
 国際協力事業団国際協力総合研修所
 技術情報課 任国情報係

| | | | |
|----|--|----|----|
| 国名 | | 年度 | 年版 |
|----|--|----|----|

| | | | | | |
|----------|-----------|-------|-------------|----|-----|
| 氏名 | | 年齢 | 歳 | 性別 | 男・女 |
| 利用区分 | 所属(担当)部課名 | 指導科目 | 派遣期間 | | |
| JICA役職員 | | | | | |
| JICA専門家等 | | | | | |
| その他 | | (所属先) | (当該国での滞在期間) | | |
| 住所 | | | | | |
| 電話番号 | | 日付 | 年 | 月 | 日 |

| ページ | 行 | 内 容 |
|-----|---|-----|
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |

| 国 総 研 記 入 欄 | | | | | |
|-------------|--|------------|-----|-----|-----|
| 記事 | | 技術情報課確認印 | | | |
| | | データベース修正処理 | 課長 | 代理 | 担当 |
| | | | | | |
| | | 月 日 | 月 日 | 月 日 | 月 日 |

